

四條
訣別

神なれば八幡に勝れたる神はよもをはせじ。又偏頗はよも有ら
じ。こは思へとも。一切經並に法華經のをきての如きんばこの神
は大科の神也。弘安三年十二月

○種々御振舞鈔内三十三由比の濱に打出て御靈の前に至りて又
云く。暫し殿原これに告へき人ありきて。中務三郎左衛門尉と申
す者の許へ熊王と申す童子を遣したりしかば。急き出ぬ。今夜頸
切られにまかる也。此數年が間願ひつる事これ也。此娑婆世界に
して雉となりし時は鷹につかまれ鼠となりし時は猫にくらは
れき。或は妻に子に敵に身を失ひし事大地微塵より多し。法華經
の御爲には一度失ふことなし。されば日蓮貧道の身と生て父母

熊王を
遣はす

四條の
決心

の孝養心にたらず國の恩を報すべき力なし。今度頸を法華經に
奉りて其功德を父母に回向せん。其餘りは弟子檀那等に配當はくへ
しと申せし事これなり。建治二年

○波木井殿御書外三十五文永八年辛九月十二日には頸の座に登
り相摸の龍口へ遣はさる。今は最後と思ひしかば御靈の宮の前
にて馬をひかへ熊王丸を使ひて四條左衛門尉に知らせしか
ば。かちはだしにて馬の口に取り付て路すがら啼き悲しんで。事
實にならば腹を切んさせし志をは何の世にかは忘るべく候。法
華經に命を進らせ日蓮より前に腹を切んと思ひきりし事をば
釋迦佛先知食して候也。弘安五年十月七日

四條の
決心の
喜び

○四條金吾殿御返事外九八五何事よりも文永八年の御勘氣の時既に相摸國龍口にて頸切られんごせし時にも殿は馬の口に付て足歩赤足にて泣き悲み給ひ事實にならば腹きらんこの氣色なりしをば何の世にか思ひ忘るべき。弘安三年十月八日

四條の
決心

○四條金吾殿御消息外九八九度々の御音信申し盡し難く候。さてもさても去十二日の難の時。貴邊龍口までつれさせ給ひ。しかのみならず腹を切らんと仰せられし事こそ不思議とも申計りなけれ。文永八年九月二十一日

龍口
刑場

○種々御振舞鈔内二二三左衛門尉兄弟四人馬の口に取付て腰越龍口にゆきぬ。此にてぞ有らんずらんと思ふ所に。案に違はず兵

四條の
悲泣の
聖祖の
覺悟

神の光

太刀取
の絶倒
の兵士の
恐怖

士ども打回り騒ぎしかば左衛門尉申様只今なりと泣く。日蓮申様不覺の殿原かな是れ程の悦びをば笑へがし。如何に約束をば違へらるくぞと申せし時。江の島の方より月の如く光りたる物鞠まきの様にて辰巳の方より戌亥の方へ光り渡る。十二日の夜の味あじ爽人の面も見へさりしが。物の光り月夜の様にて人人の面も皆みゆ。太刀取目くらみ倒れ臥し兵士共た怖れ興醒きざめて一町計り馳せのき。或は馬より下りて畏かしこり或は馬の上にて躡お躡まれるもあり。日蓮申様如何に殿原かくる大に禍わざなる召人めいじんには遠とほのくぞ近く打寄れや打寄れやと高々たかたかと呼はれとも急き寄る人もなし。さて夜明けは如何に如何に頸切へくは急き切るべし。夜明けなば

依智御着

見苦しかりなんご勸めしかごも兎角の返事もなし。○はるか計りありて云く相摸の依智と申す所へ入らせ給へと申す。此れは道知る者なし先打すべしと申せごも打人もなかりしかば。さて小憩程に或る兵士の云くそれこそ其道にて候へと申せしかば。道に任せてゆく。午の時計りに依智と申處へ往き著たりしかば。本間の六郎左衛門が宅に入りぬ。酒取寄せて武士共に飲せて有しかば。各還るごて頭を低れ手を又て申す様。此の程は如何なる人にてやをはすらん。我等が頼みて候阿彌陀佛を誇らせ給ふご承はれば悪み參せて候つるに。親り拜み參せ候つる事ごもを見て候へば。尊さに年頃申しつる念佛は捨候ぬごて火打袋より珠

本間の宅へ入る武士と酒を與ふ

武士の信状及び改宗

鎌倉より使者を立てて來る

追状

數取り出して捨る者あり。今は念佛申さじと誓狀を立る者もあり。六郎左衛門が郎從等番をば受取ぬ。左衛門尉も還りぬ。其日の戌時計りに鎌倉より上の御使とて立文を以て來ぬ。頸切と云ふ重たる御使かご武士ごもは思ひて有し程に。六郎左衛門が代右馬尉と申す者立文持て走り來り跪ひて申す。今夜にて候へしあら淺間しやご存じて候つるにかくる御悦ひの御文來て候。武藏守殿は今日卯の時に熱海の御湯にて候へば。急き無益事もやごまづこれへ走り參りて候と申す。鎌倉より御使は二時に走りて候。今夜の内に熱海の御湯へは走り參るべしごてまかり出ぬ。追状云。此人は失なき人なり。今暫くありて赦させ給ふべし過して

は後悔あるべしと云々。建治三年

難に逢ふて信を心の色を増す

○土木殿御返事外三十二卷八十八上の責させ給にこそ法華經を信じたる色もあらはれ候へ。月は虧かて満潮は干て満る事疑なし。此も罰あり必徳あるべし。何なにしにか歎ん。此十二日辰時御勸氣。武藏守殿御預りにて十三日丑時に鎌倉を出て佐土の國へ流れ候が。當時本間の依智よと申所に依智六郎左衛門尉殿の代官右馬太郎と申す者預りて候が。今四五日はあるへげに候。御歎きはさる事に候へどもこれには一定と本より期して候へば歎かず候。今迄頸の切れぬこそ本意ほんいなく候へ。法華經の御故に過去に頸を失ひならば。かくる少身の身にて候べきか。又數々見擯出と説れて度々失に

あたりて重罪を消てこそ。佛にもなり候はんすれば。我と苦行を致す事は心から也。文永六年九月十四日

星降

自我偈の誦誦

日蓮なくんば佛勸しからん

○種々御振舞鈔内三十四卷一三六其夜は十三日兵士ども數十人坊の邊り並に大庭に並居候き。九月十三日の夜なれば月大に晴れてありしに夜中に大庭に立出でく月に向ひ奉りて。自我偈少々讀奉り諸宗の勝劣法華經の文あらく申て。抑も今の月天は法華經の御坐に列りまします名月天子ぞかし。寶塔品にして佛勸を受給ひ囑累品にして佛に頂を摩なられ參せ。如世尊勸く當具奉行と誓狀を立し天ぞかし。佛前の誓は日蓮なくば虚くてこそ御座すべけれ。今かくる事出來せば急き悦よろこひをなして法華經の行者にもか

嬉顔

はり佛勅をも果して誓言の驗をば遂させ給ふべし。いかに今驗のなきは不思議に候ものかな。何なる事も國になくしては鎌倉へも還んごも思はず。驗こそなくごも嬉し顔にて澄渡らせ給ふはいかに。大集經には日月不現明と説れ仁王經には日月失度と説れ最勝王經には三十三天各生瞋恨とこそ見ゆ侍るに。いかに月天いかに月天と責しかば。其驗にや天より明星の如くなる大星下りて前の梅の木枝に懸て有しかば。兵士皆椽より飛下り或は大庭に平伏し或は家の後へ逃ぬ。やかて即天かき曇て大風吹來て江の島の鳴るこて空の響く事大なる鼓を打が如し。建治二年

第七 佐渡法難

明星梅
樹に降る

佐渡
流罪

○波木殿御書續外三十五既に頸切らんごせしが其夜は延候て相摸の依智へ渡され木間の六郎左衛門が預たきぬ。明十三日の夜ふけ方に不思議現ず大星下て庭の梅の枝に懸りき。爾る故にや死罪を留められ流罪に行はれ佐渡國へ遣はさる。弘安五年十月七日

○寺泊御書續内六十七今月十月十日起相州愛甲郡依智郷付武藏國久目

依智
發足
寺泊
津着

法華の
明鏡

河宿經于十二日付越後國寺泊津自此互大海欲至佐渡國順風不定不知其期道間事心莫及又不及筆但暗可推度又自本存知之上始非可歎止之法華經第四云而此經者如來現在猶多怨嫉況滅度後第五卷云一切世間多怨難信。○或人難日蓮云不知機立顯義值難。或人云如勸持品者深位菩薩義也違安樂行品。或人云我存此義

數々擯出
日蓮は
不輕は
菩薩
代官

不言云云。或人云、唯教門計也。雖具我存之、下和切足、清丸給于穢丸、云名欲及死罪時、人咲之、雖然其人未流善名、汝等邪難亦可爾。勸持品云、有諸無智人、惡口罵詈等云云。日蓮當此經文、汝等何不、入此經文、及加刀杖者等云云。日蓮讀此經文、汝等何不、讀此經文、常在大衆中、欲毀我等過等云云。向國王大臣婆羅門居士等云云。惡口而擧蹙數々見擯出、數々者度々也。日蓮擯出度々流罪二度也。法華經三世說法儀式也過去、不輕品今勸持品、過去、不輕品也今勸持品、未來可爲不輕品。其時日蓮即可爲不輕菩薩。○當時當世三類、敵人、有之、但八十万億那由陀、諸菩薩不見一人、如乾潮不、滿月虧不、滿清水浮、月植木、棲鳥日蓮、八十万億那由陀、諸菩薩爲代官、申之。彼諸

佐渡者
修學の
目的
成佛の
道

菩薩請加被者也。此入道佐渡國、可爲御供之、由承申之。可然用途云、旁有煩之故、還之。御志始不及申候。人々如是申給。但小僧等懸心候。便宜之時、早早可聽之。穴賢々々。文永八年十月二十二日辰時。

○佐渡御勸氣鈔外七十八九月十二日に御勸氣を蒙て。今年十月十日佐渡國へ罷り候也。本より學文し候し事は佛教を究めて佛になり恩ある人をも助けんと思ふ。佛になる道は必ず身命を捨る程の事ありてこそ佛にはなり候らめと推し計らる。既に經文の如く惡口罵詈刀杖瓦礫數々見擯出と説れて。かゝるめに値候こそ法華經を讀むにて候らめと。彌々信心も起り後生も頼母敷候。死して候は必ず各各をも助け奉るべし。天竺に師子尊者と申せ

旃陀羅

し人は檀彌羅王に頸を刎れ。提婆菩薩は外道につき殺る。漢土に竺道生と申せし人は蘇山と申所へ流る。法道三藏は面に火印をやかれて江南と申所へ流されき。是皆法華經の徳佛法の故也。日蓮は日本國東夷東條安房國海邊の旃陀羅が子也。徒らに朽ん身を法華經の御故に捨參らせん事。あに石に金を替るにあらずや。各歎せ給へからず。道善の御房にもかう申し聞かせ參せ給へし。領家の尼御前へも御文と存候へごもかくる身の文なればなつかしやと覺さざるらん。と申ぬる。便宜あらば各御物語り申させ給候へ。文永八年十月

海人が子

○本尊問答鈔内二八、九日蓮は東海道十五箇國內第十二に相當る

安房國長狹郡東條郷片海の海人が子也。弘安元年九月

旃陀羅が家より出づ

○佐渡御書内三七日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり。心こそ少し法華經を信じたる様なれごも身は人身に似て畜身也。魚鳥を混丸して赤白二諦とせり。其中に識神をやごす。濁水に月のうつれるが如し。糞囊たんのうに金を包めるなるべし。心は法華經を信ずる故に梵天帝釋をも猶恐しと思はず。身は畜生の身也。色心不相應の故に愚者のあなづる道理也。○我今度の御勘氣は世間の失一分もなし。偏に先業の重罪を今生に消して後生の三悪を脱れんずるなるべし。文永九年三月二十日 弟子檀那御中

梵釋を恐れず

在島の形

○種々御振舞御書内三十四同十月十日に依智を立て同十月二十

塚原

八日に佐渡國へ著ぬ。十一月一日に六郎左衛門が家のうしろ見の家より塚原と申山野の中に。洛陽の蓮臺野の様に死人を捨る所に一間四面なる堂の佛もなし。上は板間あはず四壁はあばらに雪降り積て消る事なし。かくる所に敷皮打しき蓑うち著て夜をあかし日をくらす。夜は雪雹雷電ひまなし。晝は日の光もさくせ給はず心細かるべき住居なり。彼李陵が胡國に入りて巖岨に責られし。法道三藏の徽宗皇帝に責られて面に火印をさくれて。江南に放たれしも只今と覺ゆ。あら嬉や檀王は阿私仙人に責られて法華經の功德を得給ひき。不輕菩薩は上慢の比丘等の杖にあたりて一乗の行者と云れ給ふ。今日蓮は末法に生て妙法蓮華經

李陵に
比す

檀王
阿私
不輕

應識に
依て成
佛を決
す

在世に
比す

佐渡の
形状の

の五字を弘てかくる責に値り。佛滅度後二千二百餘年が間恐くは天台智者大師も一切世間多怨難信の經文をば行じ給はず。數見擲出の明文は但日蓮一人也。一句一偈我皆與授記は我也。阿耨多羅三藐三菩提は疑なし。相摸守殿こそ善知識よ平左衛門こそ提婆達多よ。念佛者は瞿伽利尊者持齋等は善星比丘。在世は今にあり今は在世なり。○かくて過す程に庭には雪つもりて人もかよはず。堂には荒き風より外は音信るものなし。眼には止觀法華をさらし口には南無妙法蓮華經と唱へ。夜は月星に向ひ奉りて諸宗の違目と法華經の深義を談する程に年もかへりぬ。建治三年
●波木井殿御書縮外三十五十月十日に相摸の依智を立て同二十八

日に佐渡國へ着ぬ。本間六郎左衛門尉が後見の家より北に塚原
と申て洛陽の蓮臺野の様に死人を送る三味原の野邊に垣もな
き草堂に落著ぬ。夜は雪ふり風はげし切れたる蓑を著て夜を明
す。北國の習なれば北山の嶺の山をろしの烈しき風身にしむ事
をば但思ひやらせ給へ。弘安五年十月七日

佐渡の
寒氣

○富木入道殿御返事外三十三此比は十一月下旬なれば相州鎌倉に
候し時の思には四節の轉變は万国皆同しかるべしと存候し處
に。此北國佐渡國に下着候て後。二月は寒風頻に吹て霜雪更に降
ざる時はあれども日の光をば見るこごなし。八寒を感現身人の
心は同禽獸不知主師親何況佛法の邪正師の善惡は思もよらざ

八寒に
譬ふ

要文の
散佚を
戒む

るをや。此等は且置之。○又貫邊に申付し一切經の要文智論の要
文五帖一處に可被取集候。其外論釋の要文散在あるべからず候。
又小僧達談義あるべしと仰らるべく候。流罪の事痛歎せ給ふべ
からず。文永八年十一月二十三日

佐渡紙
乏し

○佐渡御書内八三十七佐渡國は紙候はぬ上。面々に申せば煩あり一
人も漏れは恨ありぬべし。此文を心ざしあらん人々は寄合て御
覽し料簡候て心なくさませ給へ。○外典書の貞觀政要すべて外
典の物語。八宗の相傳等此等がなくしては消息もかくれ候はぬ
に。搆て搆て給候へし。文永九年三月二十日

書籍の
要求

○波木井殿御書外三十五彼國の守護も國主の御計なれば日蓮を

阿佛坊
供養

晝夜の
警戒の

怨む其外万民も皆其命に従ふ。鎌倉にては念佛者禪律眞言等が一同に訴訟申て何れにも日蓮を鎌倉へ還さぬ様にと計ひ。極樂寺の良觀房も武藏前司殿の私の御教書を申し下して弟子に持せて佐渡國へ渡。て怨をなす。其に従て地頭並に念佛者等が日蓮が居たるあたりに。夜も晝も立副ひて通ふ人を強にあやまたんごすれば叶ふべき様もなし。何より問へき人一人もなし。天の御計にてや候けん阿佛房の日蓮を扶持せし事は。偏へに悲母の佐渡國に生れ替らせ給ひて日蓮が命を助け給ふ歟。漢土に沛公と申せし者あり王相辱此者重勅宣を下して沛公を打て進らせたらん者には捕忠の賞を給ふべき宣旨ありしかば。沛公山邊に隠

沛公妻
の例

居して命助かり難かりしに。沛公が妻山邊に尋ね行て時々助け候き。彼は夫妻なれば年來の情捨て難ければ尋ねけん。此は他人なれども人目を隠れ忍ひて日蓮を憐愍し或は處を追れ或は過代を引きなんごせしかば。内々志ありし人も何にとも申す一人もなし。弘安五年十月七日

千日尼
の深志

○千日尼御前御書内三三三尼御前並に入道殿は彼の國に有る時は人目を恐れて夜中に食を贈り。或時は國の責をも憚からず身にも替らんごせし人々也。されば痛りし國なれども剃たる髪を後へ引れ進む足もかへりぞかし。何なる過去の縁にてや有りけんご覺束なかりしに。又いつしか此れまでさしも大事なる我夫

千日尼
夫を
使
とす

身延へ
三度詣
つ

を御使にて遣わされて候。夢か幻か尼御前の御姿をは見參せ候はねごも心をは此れに留め覺へ候へ。日蓮を戀しくをはせば常に出る日夕へに出る月を拜ませ給へ。何時もなく日月に影を浮る身也。又後生には靈山淨土へ參り値ひ參らせん。建治元年六月十六日

○千日尼御前御返事内二七六何佛房に櫃かぶを負せて夜中に度々御渡り有し事何の世にか忘るべき。只悲母の佐渡國に生れ替りて有るか。○去文永十一年より今年弘安元年までは既に五箇年が間此山中に候に。佐渡の國より三度まで夫を遣す。いく程の御心ざしぞ大地よりもあつく大海よりもふかき御心ざしぞかし。○七月二十七日酉時に阿佛房を見つけて。尼御前は如何に紺入道

入道夫
妻の志
化祖の
聖道の

殿は如何に。先問ひて候つればいまだやまず。弘安元年七月二十八日

○一谷入道御書内二三五文永九年の夏の比佐渡國石田郷一谷に云ひし處に有しに。預りたる名主等は公に云ひ私に云ひ。父母の敵よりも宿世の敵よりも悪げに有しに。宿の入道に云ひ妻に云ひ遣う者に云ひ。始は畏恐れてありしか。ごも先世の事にや有けん。内々不便と思ふ心付ぬ。預りより預る食は少し付ける弟子は多くありしに。僅の飯の二口三口ありしを或は折敷に分け或は手に入れて食しに。宅主かみ内内心あて外には恐るる様なれごも。内には不便げにありし事何の世にか忘れん。我を生てたはせし父母よりも當時は大事こそ思ひしか。何なる恩をも勵むべし。まじ

て約束せし事違ふべしや。然れども入道の心は後世を深く思てある者なれば久く念佛を申つもりぬ。其上阿彌陀堂を造り田島も其佛の物也。地頭も又恐しなんご思ひて直に法華經にはならず。是は彼身には第一の道理ぞかし。然れども又無間大城は無疑設ひ是より法華經を遣したりとも世間も恐しければ念佛捨へからずなんご思はゞ。火に水を合せたるが如し。謗法の大水法華經を信ずる小火を消ん事疑ひなかるべし。入道地獄に墮るならば還て日蓮が失になるべし。建治元年五月八日

信女の渡島

○日妙聖人御書内三十九 玄奘は西天に法を求て十七年十万里にいたり。傳教御入唐但二年なり波濤三千里を隔てたり。此等は男

女人と經論

子なり上古なり賢人也聖人也。いまた聞ず女人の佛法を求めて千里の路をわけし事を。龍女が即身成佛も摩訶波闍波提比丘尼の記筋に預りしも。知らず權化にや有けん。又在世の事也。男子女人其性本より別れたり。火は煖に水は冷し。海人は魚を取るに巧也。山人は鹿を取るに賢し。女人は物を嫉に賢し。こそ經文には明されて候へ。いまだ聞ず佛法に賢し。こは女人の心を清風に譬たり。風はつなくとも取り難きは女人の心也。女人の心をは水に畫かきに譬へたり。水面には文字留らざる故也。女人をば誑人に譬へたり。或時は實也。或時は虚也。女人をば河に譬へたり。一切曲れる故也。而るに法華經は正直捨方便等皆是眞實等質直意柔軟等柔

實語の
女人

不輕に
准して
日妙と
稱す

和質直者等と申て。正直なる事弓の絃の張れるが如く墨の繩を
 打が如くなる者の信じ參らする御經也。○今實語の女人にて御
 坐すか。當知須彌山を載て大海を渡る人をば見るこも此女人を
 ば見るべからず。砂を蒸て飯となす人をば見るこも此女人をば
 見るべからず。○故に名を一附奉て不輕菩薩の義になぞらへん
 日妙聖人等云云相州鎌倉より北國佐渡國其中間一千餘里に及
 べり。山海遙に隔てく山は峨々海は濤々。風雨時に隨ふ事なし山
 賊海賊充滿せり。宿々泊々民の心虎の如し犬の如し。其上當世は
 世亂れ去年より謀叛の者國に充滿し今年二月十一日合戰。其よ
 り今五月の末いまだ世間安穩ならず。而ごも一の幼子あり。預く

塚原
問答

諸宗僧
の僉
議

べき父も頼しからず。離別既に久し。旁筆も及ばず心辨へ難けれ
 ばこゝめ畢ぬ。文永九年五月二十五日 日妙聖人

○種々御振舞鈔内二十四何處も人心の果敢さは。佐渡國の持齋念佛
 者の唯阿彌陀佛生喩房印性房慈道房等の數百人寄合て僉議す
 と承る。聞ふる阿彌陀佛の大怨敵一切衆生の惡知識の日蓮坊此
 國に流れたり。何ご無ごも此國へ流されたる人の始終活らるゝ
 事なし。設ひ活らるゝごも歸る事なし。又打殺したれごも御咎な
 し。塚原と云ふ所に只一人あり。何に剛なりごも力強くごも人な
 き處なれば集りて射殺せがしご云ふ者もありけり。又何ご無ご
 も頸を切らるべかりけるが。守殿の御臺所の御懷妊なれば暫く

諸宗の
僧侶に
守護の
集る所

正月十
六日問
答六ヶ
國の法
師

諸人
の口

切られず終には一定さきく。又云く六郎左衛門尉殿に申て切ら
ずんは謀^{はかり}べしと云ふ。多くの義の中に此れについて守護所に數
百人集りぬ。六郎左衛門尉の云く上^{かみ}より殺しまいすまじき副狀
下て蔑るべき流人にはあらず。過あるならば重連が大なる失な
るべし。それよりは只法門にて攻よかしと云ひければ念佛者等
或は浄土の三部經或は止觀或は眞言等を。小法師等が頸にかけ
させ或は腋に挟ませて正月十六日に集る。佐渡國のみならず越
後越中出羽奥州信濃等の國々より集れる法師等なれば。塚原の
堂の大庭山野に數百人六郎左衛門尉兄弟一家。さならぬ者百姓
の入道等數知らず集りたり。念佛者は口口に悪口をなし眞言師

聖祖
警言

重連喧
嘩を制
す

一言二
言に過
す

經を忘
れて論
と云ふ

は面々に色を失ひ天台宗ぞ勝へき由を言^いる。在家の者共は聞ふ
る阿彌陀佛の敵よと詈り。騒ぎ響く事震動雷電の如し。日蓮は暫
く騒せて後各靜らせ給へ。法門の御爲にこそ御渡りあるらめ悪
口等よしなしと申せしかば。六郎左衛門を始て諸人然るべしと
て。悪口せし念佛者をは素首^{すくび}を突き出しぬ。さて止觀眞言念佛の
法門一一に彼が申様を臊し揚て承伏せさせては。丁^{てい}は詰め一
言二言には過ず。鎌倉の眞言師禪宗念佛者天台の者よりも墓な
き者共なれば只思ひやらせ給へ。利劔を以て瓜を切り大風の草
を靡すが如し。佛法の愚^{おろか}なるのみならず或は自語相違し。或は經
文を忘れて論と云ひ釋を忘れて論と云ふ。善導が柳より落弘法

佐渡御
赦免

諸天
諫曉

大師の三鉢を投たる大日如來と現したる等をば。或は妄語或は物に狂へる處を一一に攻たるに。或は悪口し或は口を閉ぢ或は色を失ひ。或は念佛僻が事也けり。云ふ者もあり。或は當座に袈裟平念珠を捨て念佛申まじき由誓狀を立る者もあり。建治二年

○光日房御書縮内四十六法華經の眞實まことにたはしまし日月我を捨て給ずは。還り入て又父母の墓をも見る邊も有りなん。心強く思ひて。梵天帝釋日月四天は何になり給ひぬるやらん。天照大神正八幡宮は此國に御在ぬか。佛前の御起請は虚くて法華經の行者をば捨給ふか。若此事叶はずば日蓮が身のなにもならん事は惜からず。各現に教主釋尊と多寶如來と十方諸佛の御寶前にし

て誓狀を立給しが。今日蓮を守護せずして捨給ならば正直捨方便の法華經に大妄語を加へ給へるか。十方三世の諸佛を狂惑たほがし奉れる御失は。提婆達多が大妄語にも超へ瞿伽利尊者が虚誑罪にもまされたり。設ひ大梵天として色界頂に居し千眼天と云れて須彌頂に御坐とも。日蓮を捨給ならば阿鼻の炎には薪となり無間大城には出る期たはせじ。此罪恐しとたばさば急き急き國土に驗を出し給へ。本國へ還し給へ。高き山に登りて大音聲を放て叫しかば。九月十二日に御勸氣十一月に謀反の者出できたり。返る年の二月十一日に日本國の警固かたかたるべき大將共よしく打殺れぬ。天の責と云ふ事あらは也。此にや驚かれけん弟子共

弟子の赦

燕丹太子日藏上人

赦免状の着

佐渡の發足

鎌倉へ着

赦れぬ。而もいまた赦ゆるさりしかば彌強盛に天に申せしかば。頭の白かさき鳥飛來りぬ。彼燕丹太子の馬鳥の例日藏上人の山鳥頭も白く成にけり我還るへき時やきぬらんこながめし此れ也。申もあへず。文永十一年二月十四日の御赦免状同三月八日に佐渡國に著ぬ。同十三日に國を立て網羅あみと云ふ津にをりて十四日は彼の津に留り。同十五日に越後の寺泊の津に著へきが。大風に放たれ幸に二日路ふたつかぢをすぎて柏崎に著て。次日は國府に著十二日を經て三月二十六日に鎌倉へ入りぬ。建治三年三月

○波木井殿御書外二二五法華經の正理なれば別の謬りなくて佐渡國にて四箇年と申せし。同十一年丙二月十四日被レ赦免。同三月

佐渡の諸僧に訴ふ

二十六日に鎌倉へ上りぬ。弘安五年十月七

○種々御振舞御書内一四、五念佛者の長者の唯阿彌陀佛持齋の長者、性諭房良觀が弟子道觀等。鎌倉に走り登て武藏守殿に申す。此御房島に候ものならば堂塔一字も候へからず僧一人も候まじ。阿彌陀佛をば或は火に入れ或は河に流す。夜も晝も高き山に登て日月に向て大音聲を放て上を呪咀し奉る。其音聲一國に聞ふと申す。武藏前司殿是をきく上へ申迄もあるまじ。先國中の者日蓮房につくならば或は國を逐ひ或は牢に入れよ。私の下知を下す。又下文くだしな下る。かくの如く三度。其間の事申さざるに心をもて計りぬべし。或は其前を通行とほれり。と云ふて牢に入れ或は其御房

念佛者
等聖祖
の生還
を哀む

信州の
教敵聖
祖を途
に要す

に物を進せけり云ふて國を逐ひ。或は妻子をこる。かくの如し
て上へ此由を申されければ。案に相違して去文永十一年二月十
四日の御赦免狀同三月八日に島につきぬ。念佛者僉議して云く
此れ程の阿彌陀佛の御敵善導和尚法然上人を罵程の者が。偶御
勘氣を蒙て此島に放れたるを御赦免あること生て歸さんは心
憂き事也云ふて。様々の支度ありしかども。何なる事にや有け
ん思はざるに順風吹來て島をば立しかば。間合悪ければ百日五
十日にも渡ず。順風には三日なる所を須臾の間に渡りぬ。越後の
國府信濃の善光寺の念佛者持齋眞言師等は雲集して僉議す。島
の法師原は今迄生て還すは人乞丐也。我等は何にも生身の阿彌

無事鎌
倉に還
る

身延
入山

山林に
身を隠
す

陀佛の御前をば通すまじと僉議せしかども。又越後の國府より
兵者共あまた日蓮に添て善光寺を通りしかば力及ばず。三月十
三日に島を立て同三月二十六日に鎌倉へ打入りぬ。建治二年

第八 身延入山

○波木井殿御書外二二五如何にも今は叶まじき世也。國の恩を報
ぜんが爲に國に留り三度は諫むべし。用ひずんば山林に身を隠
せ云ふ本文あり。本より存知せり。何なる山中にも籠りて命
の程は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外は他事なし。時に
五十三同五月十二日鎌倉を立て甲斐國へ分け入る。路次のいぶ
せき峯に登れば日月を頂が如し谷に下れば穴に入るが如し。河

波木井
對面

天竺の
靈山に
勝る

猛くして船渡らず大石流れて箭をつくが如し。道は狭くして繩の如し草木繁りて路見へず。かくる所へ尋ね入る事淺からざる宿習也。かくる道なれども釋迦佛は手を引帝釋は馬となり梵王は身に立添ひ日月は眼に入替らせ給ふ故にや。同十七日甲斐國波木井の郷へ着ぬ。波木井殿に對面有しかば大に悦び。今生は實長が身に及ばん程は見つぎ奉るべし。後生をば聖人助け給へし契りし事は只事とも覺ゆず。偏に慈父、悲母の波木井殿の身に入替り日蓮をば哀れみ給歟。其後身延山へ分入て山中に居し法華經を晝夜讀誦し奉り候へば。三世の諸佛十方の諸佛菩薩も此砌に御坐らん。釋迦佛は靈山に居して八箇年法華經を説給ふ。日蓮

は身延山に居して九箇年の讀誦也。傳教大師は比叡山に居して三十餘年の法華經の行者也。雖然、彼山は濁れる山也。我此山は天竺の靈山にも勝れ日域の比叡山にも勝れたり。然れば吹風もゆるく水草も流るゝ水の音までも此山には妙法の五字を唱へず。云ふ事なし。日蓮が弟子檀那等は此山を本として參るべし。此則靈山の契也。弘安五年十月七日

庵室の
造營

○種々御振舞鈔内二四三日蓮は南無妙法蓮華經を唱ふる故に二十餘年所を追はれ二度まで御勘氣を蒙り。最後には此山に籠る。此山の體たらくは西は七面の山東は天子の嶽北は身延山南は鷹取山。四の山高き事天に付きさがしき事飛鳥も飛難し。中に四

の河あり所謂富士河早河大白河身延河也。其中に一町ばかり間の候に庵室を結びて候。晝は日をみず夜は月を拜せず冬は雪深く夏は草茂り。問ふ人希なれば道を踏わくる事難し。殊に今年は雪深くして人間ふ事なし。命を期として法華經計りを頼み奉り候に御音信あり難く候。知ず釋迦佛の御使歟過去の父母の御使歟と申計りなく候。延治二年

身延の生活

○箇御器鈔内、二十一、五十九今は罪も消へ過も脱れなんと思ひて鎌倉を去りて此山に入て七年也。此山の爲體日本國の中には七道あり七道の内に東海道十五箇國。其内に甲州飯野御牧波木井の三箇郷之内波木井と申す此郷之内戊亥の方に入て二十餘里の深山

四山四河

あり。北は身延山南は鷹取山西は七面山東は天子山也。板を四枚ついで立てたるが如し。此外を回りて四の河あり。從北南へ富士河自西東へ早河此は後也。前に西より東へ波木井河の中に一の瀧あり身延河と名けたり。中天竺之鷲峰山を此處に移せる歟將又漢土の天台山の來れる歟と覺ゆ。此四山四河の中に手の廣さ程の平かなる處あり。爰に菴室を結んで天雨を脱れ木の皮をはぎて四壁とし自死の鹿の皮を衣とし。春は蕨を折て身を養ひ秋は果を拾ひて身を支へ候つる程に。去年十一月より雪降り積て改年の正月今に絶る事なし。菴室は七尺雪は一丈四壁は氷を壁とし軒の氷柱は道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり内には雪を米と積

春は蕨
秋は果

室は七
尺一丈
雪を米
と観ず

現身に
八寒を
感ず
頭は鶉
衣は氷

む。本より人も來らぬ上雪深くして道塞がり問ふ人もなき處なれば現在に入寒地獄の業を身に償へり。生なから佛には成ずして又寒苦鳥と申鳥にも相似たり。頭は刺る事なければ鶉の如し衣は氷にこぢられて鴛鴦の羽を氷の結べるが如し。かくる處へは古へ昵びし人も不問。弟子等にも捨られて候つるに。此御器を給ひて雪を盛りて飯と觀じ水を飲て漿と思ふ。志のゆく所思ひ遣せ給ひ又々可申候。恐々謹言 弘安三年正月二十七日 秋元太郎兵衛殿

小袖と
慈氏

○四條金吾許御文内二七、二六 白小袖一綿十兩髓に給候畢。歳も傾き候又處は山の中風烈しく庵室は籠の目の如し食物は氷の如に候へば。此小袖給候て頓て身を煖まらんと思へども。明年の一日

身延と
佐渡

と書れて候へば。迦葉尊者の鷄足山に籠りて慈尊の出世五十六億七千万歳を待るくも斯や久しかるらん。弘安三年十二月十六日

○妙法尼御返事内二七、二八 今は此山に獨りすみ候。佐渡國にありし時は里より遙に隔たれる野と山との中間に塚原と申す御三昧所あり。彼處に一間四面の堂あり。そらは板間あわず四壁は破れたり雨は外の如し雪は内に積る。佛は御坐せず莖疊は一枚もなし。然ども我根本より持參せて候教主釋尊を立參らせ。法華經を手に握り蓑をき笠をさして居たりしかども。人も見へず食も與へずして四箇年也。彼蘇武が胡國に留られて十九年が間蓑をき雪を食として有しが如し。今又此山に五箇年あり。北は身延山と

蘇武に
比す

申て天にはしだて南は鷹取と申て鷄足山の如し。西はなないたがれと申して鐵門に似たり。東は天子が嶽と申て富士の御山に太子たり。四の山は屏風の如し。北に大河あり早河と名く早き事箭を射るが如し。南に河あり波木井河と名く大石を木の葉の如く流す。東には富士河北より南へ流れたり千の銚をつくが如し。内に瀧あり身延の瀧と申す白布を天より引が如し。此内に狭小の地あり日蓮が菴室也。深山なれば晝も日を見奉らず夜も月を詠むる事なし。峯には巴峽の猿喧しく谷には波の下る音鼓を撃が如し。地には敷ざれとも大石多く山には瓦礫より外には物もなし。國主は悪み給ふ万民は訪らはず。冬は雪道を塞ぎ夏は草生

繁り鹿の遠音うらめしく蟬の鳴聲喧し。訪ふ人無れば命もつぎ難し。膚をかくす衣も候はざりつるに。かくる衣を送らせ給へるこそ何にとも申計り無く候へ。見し人聞し人だにも哀れとも申さず。年比なれし弟子仕へし下人だにも皆逃失せ訪らはざるに。聞もせず見もせぬ人の御志哀なり。偏に是別れし我父母の生れ替らせ給ひけるか。十羅刹の人の身に入替りて思ひよらせ給ふ歟。唐の代宗皇帝の代に蓬子將軍と申せし人の御子李如暹將軍と申せし人。勅定を蒙て北の胡地を責し程に。我勢數十萬騎は打取れ胡國に生け取れて四十年漸く經し程に。妻をかたらひ子をまうけたり。胡地の習ひ生取をば皮の衣を服せ毛帶を懸させて

李如暹
に比す

候が。只正月一日計り唐の衣冠をゆるす。一年ごごに漢土を戀て
 肝を切り涙を流す。而程に唐の軍起て唐の兵胡地を責し時ひま
 をねて胡地の妻子をふり捨てて逃しかば。唐の兵は胡地の夷を
 て捕へて頸を切らんごせし程に。ごかうして徳宗皇帝に參せて
 有しかば。何に申せごも聞もほごかせ給はずして南の國吳越ご
 申方へ流されぬ。李如暹歎て曰く進不得見涼原之本郷退不得逢
 胡地妻子云云。此心は胡地の妻子をも捨又唐の古き栖をも見ず
 あらぬ國に流されたりご歎く也。我身には大忠ありしかごもか
 くる歎あり。日蓮も又如。此此日本國を助ばやご思ふ心に依りて
 申出す程に。我生れし國をもせがれ又流されし國をも離れぬ。既

李如暹
 は妻子
 聖祖は
 墳墓は

に此深山に籠りて候が彼李如暹に似て候也。但し本郷にも流さ
 れし處にも妻子無れば歎く事はよもあらじ。唯父母の墓ご馴し
 人々の如何がなるらんご覺束なしご申計なし。但嬉き事は武士
 の習ひ君の御爲に宇治勢多を渡し前馳なんごして有し人はた
 ごひ身は死すれごも名を後代に擧げ候ぞかし。日蓮は法華經の
 故に度々所を追れ戦をし身に手負ひ弟子等を殺され兩度まで
 遠流せられ既に頸に及べり。是偏に法華經の御爲なり。弘安元年九月六日
 ○身延山御書縮内三九八誠三九七に身延山の栖はちはやふる神も惠を垂
 れ天下りましますらん。無心しづの男しづの女までも心を留め
 ぬへし。哀を催す秋の暮には草の庵に露深く檐に集多蜘蛛の糸

佛の修
 行に比
 す

玉を連き紅葉いつしか色深して断々に傳ふ懸樋の水に影を移せば。名にしたふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ。又後ろには峨々たる深山聳へて梢に一乗の果を結び下枝に鳴く蟬の音滋く。前には湯湯なる流水漑て實相眞如の月浮び無明深重の闇晴て法性の空に雲もなし。かくる砌なれば庵の内には晝は終日に一乗妙典の御法を論談し夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳へ聞く釋尊の住給けん鷲峰を我朝此砌に移し置ぬ。霧立嵐烈き折々も山に入て薪をこり露深き草を分て深谷に下て芹をつみ。山河の流も早き巖瀬に菜をすくぎ袂濡れて干わぶる思ひは昔し人丸が詠じける和歌の浦に藻汐垂つく世を渡る海士もかくやと

樂法
梵志

ぞ思ひ遣る。つくづく浮身の有様を案ずるに佛の法を求め給しに不異。昔釋尊樂法梵志としては皮を剥て紙とし髓の水を取て硯の水とし肉を割て墨とし骨を摧て筆として。下方の迦葉佛に値ひ奉て如法應修行非法不應行今世若後世行法者安穩云云。此文を傳給ふ。薩埵王子としては飢たる虎の爲に身を與へ。雪山童子としては半偈の爲に身を投げ尸毗王としては鳩の爲に肉を秤にかけ。乞眼婆羅門には眼をくじりて取せ給ひき。○立わたる身のうき雲も晴ぬべしたぬ御法の鷲の山風。建治元年八月二十一日

○南條兵衛七郎殿御返事内三六九 其上此處は人倫を離れたる山中也。東西南北を去て里もなし。かくる心細き幽谷なれども教主

身延は
即靈山

聖祖の胸中
の四處道場

釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し。日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處也。舌の上は轉法輪の所喉は誕生の處。口中は正覺の砌なるべし。かゝる不思議なる法華經の行者の住所なれば争か靈山淨土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し人貴きが故に所尊しと申は是也。神力品云。若於林中若於樹下若於僧坊乃至而般涅槃云云。此砌に望まん輩は無始の罪障忽に消滅し三業の惡轉じて三徳を成ぜん。彼中天竺の無熱池に臨し惱者が除愈心中熱氣充滿其願如清涼池と嘯きしも。彼此異なるも雖も其意は争か替るべき。彼月氏の靈鷲山は本朝此身延の嶺也。參詣遙に中絶せり急々に可企來臨。

新池の
登山

是にて待入て候へし。弘安四年九月十一日

○新池殿御消息縮内一八四九日蓮天神七代地神五代人王九十餘代に
いまだ此程法華經の故に三類の敵人に怨まれたる者なき也。か
かる上下万人一同の悪れ者にて候に此まで御渡り候し事。たほ
ろげの縁にはあらず宿世の父母歎昔の兄弟にてたはしけるが
故に思付せ給ふ歎。又過去に法華經の縁深くして今度佛になら
せ給ふべき種の熟せるかの故に。在俗の身として世間ひまなき
人の公事のひまに思出させ給ひけるやらん。其上遠江國より甲
州波木井の郷身延山へは道三百餘里に及べり。宿々のいぶせき
嶺に昇れば日月を頂き谷へ下れば穴へ入か覺ゆ。河の水は矢

を射るが如く早し大石流れて人馬むかひ難し船危くして紙を
水にひたせるが如し。男は山かつ女は山母ママの如し。道は繩の如く
細く木は艸の如く繁し。かくる所へ尋ね入せ給ひて候事何なる
宿習なるらん。釋迦佛は御手を引き帝釋は馬となり梵王は身に
隨ひ日月は眼となり替らせ給ひて入せ給ひけるにや。有難し有
難し。事多しと申せとも此程風たこりて身苦しく候間留候畢ぬ。

弘安二年五月二日

○四條金吾殿御返事外二九六 當國當山に入て己に七年の春秋を
送る。又身の智分をば且く置きぬ。法華經の方人として難を忍ひ
疵を蒙る事は漢土の天台大師にも越へ日域の傳教大師にも勝

身延參
詣の功
徳

水に魚
林に鳥

れたり。是は時の然らしむる故也。我身法華經の行者ならば靈山
の教主釋迦寶淨世界の多寶如來十方分身の諸佛本化の大士迹
化の大菩薩。梵釋龍神十羅刹女も定て此砌に御座しますらん。水
あれば魚すむ林あれば鳥來る蓬萊山には玉多く摩黎山には旃
檀生す麗水の山には金あり。今此處も如此佛菩薩の住給ふ功德
聚之砌也。多くの月日を送り讀誦し奉る所の法華經の功德は虚
空にも餘りぬべし。然るを毎年度々の御參詣には無始の罪障も
定て今生一世に消滅すべきか。彌勵むべし勵むべし。弘安三年十月八日

入山の
深旨

○報恩鈔送文外二五三 道善御房の御死去之由去月粗承候。自身早
早と參上し此御房をもやがて遣すべきにて候しが。自身は内心

は存ぜずと雖も人目には遁世の様に見えて候へば何となくとも此山を出ず候。建治二年七月二十六日

第九 池 上 入 滅

御入
涅槃
延山
發足

○波木井殿御報内三十三畏申候。道の程別事候はで池上まで著て候。道の間山と申河と申そこばく大事にて候けるを。公達に守護せられ參せ候て。難もなくこれまで著て候事恐入候ながら悦び存候。さてはやがて歸り參り候はんずる道にて候へども。所勞の身にて候へば不定なる事も候はんずらん。さりながら日本國に衆多もてあつかうて候身を。九年まで御歸依候ぬる御心ざし申計りなく候へば。何くにて死に候とも墓をば身延の澤にせさせ

栗鹿
毛の
馬

慈愛
馬に
及ぶ

大法
三護
與靈
寶の

候べく候。又栗鹿毛の御馬は餘り面白覺へ候程に。何までも失ふまじく候。常陸の湯へひかせ候はんと思ひ候が若人にもぞさられ候はん。又其外いたはしく覺へば湯より還り候はん程。上總の藻原殿のもごに預け置き奉るべく候に。しらぬ舍人を付て候ては覺束なく覺へ候。まかり歸り候はんまで此舍人を付置候はんご存候。其様を御存の爲に申候。恐々謹言弘安五年九月十九日

○日期御讓狀外三六讓與南無妙法蓮華經。末法相應一闍浮提第一。立像釋迦佛一體。立正安國論一卷。御免狀。右爲妙法流布一切利益。於法華經中一切功德者所與大國阿闍梨也。至于盡未來際爲佛

釋尊入
滅の形
儀に比
す

法捨於身命、一心可弘通妙法者也。夫迹本雖廣不出妙法五字、昔迹今本也。廣略要之中取要中要、可令弘通一闍浮提。雖撰肝心要、豈捨廣略哉。迹門實相說者是久成之本也。壽量遠本依迹顯也。今此迹本二門共皆迹佛說也。迹無本者不得顯本、本無迹者依何垂迹。本迹雖殊不思議一也。是此經一部正意也。亦是如來第一實說也。釋尊一代之深理亦日蓮一期之功德無殘所悉所付屬日朗也。壽量品云、我本立誓願乃至皆令入佛道、每自作是念乃至速成就佛身。弘安五年十月三日

○波木井殿御書外二二五此山に入て九箇年也。佛滅後二千二百三十餘年也。日蓮一志あり一七日にして返へる様に安房國にやりて舊里を見せばやと思ひて。時に六十一と申す弘安五年壬戌九月

墓を身
延に立

心は身
延に住
九箇年
の讀誦

八日身延山を立て武藏國千束郷池上へ著きぬ。釋迦佛は天竺の靈山に居して八箇年法華經を説せ給ふ。御入滅は靈山より良に當れる東天竺俱尸那城跋提河の純陀が家に居して入滅なりしかごも。八箇年法華經を説せ給ふ山なればこて御墓をば靈山に建させ給ひき。されば日蓮も如是身延山より良に當りて武藏國池上右衛門大夫宗長が家にして可死候歟。縱何くにて死に候とも九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉り候山なれば墓をば身延山に立させ給へ。未來際までも心は身延山に可住候。日蓮は日本六十六箇國島二の内に五尺に足らざる身を一つ置く處なく候しが。波木井殿の御育みにて九箇年の間身延山にして心安く

法華經を讀誦し奉り候つる志をば。何の世にかは思ひ忘れ候へき。知ずや此人は無邊行菩薩の再誕にてや御座すらむ。

(巨下靈山御契約の御文は生死籍にあり) 弘安五年十月七日

諸佛の成道の寅の刻

○上野殿御消息外一八四三 日蓮生れし時よりいまた一日片時も心やすき事はなし此法華經の題目を弘めんと思ふ計り也。相搆て相搆て自他の生死は知らねども。御臨終の刻きみ生死の中間に日蓮必ずむかひに參り候へし。三世の諸佛の成道は子丑の終り寅の刻みの成道也。佛法の住處鬼門の方に三國共にたつる也。此等は相承の法門なるべし。弘安二年四月二十日

生前の辛苦

○筒御器鈔内一三十一 男は十九億九万四千八百二十八人女は二十

棄老國の譬

九億九万四千八百三十人也。其男の中に只日蓮第一の者也。何事の第一こならば男女に被レ惡レたる第一の者也。弘安三年正月二十七日 秋本太郎兵衛殿

四衆の憎惡

○單衣鈔内一三十一 棄老國には老者を捨て日本國には今法華經の行者をすつ。抑も此國開闢已來レ天神七代地神五代人王百代あり。神武より已後九十代欽明より佛法始りて六十代七百餘年に及びり。其中に父母を殺す者朝敵こなる者山賊海賊數を知らざれども。いまだきかず法華經の故に日蓮程人に惡まれたる者はなし。或は王に惡まれたれども民には惡まれず。或は僧は惡めば俗はもれ男は惡めば女はもれ。或は愚痴の人は惡めば智人はもれたり。此は王よりは民男女よりは僧尼愚人よりは智人惡む惡人

一代の略歴

よりは善人悪む。前代未聞の身也。後代にも有るべし。こも覺へず。故に生年三十二より今年五十四に至るまで二十餘年の間。或は寺を追ひ出され。或は處をたわれ。或は親類を煩はされ。或は夜打にあひ。或は合戦にあひ。或は悪口敷をしらず。或は打たれ。或は手を負ふ。或は弟子を殺され。或は頸を切られん。こし。或は流罪兩度に及べり。二十餘年が間。一時片時も心安事なし。頼朝の七年の合戦もひまやありけん。頼義が十二年の鬪諍も争か。是には過へき。法華經の第四云、如來、現在猶多怨嫉等云云。第五云、一切世間多怨難信等云云。建治元年八月 興藤四郎女房書

○乙御前御消息内二九三四抑も法華經を能々信じたらん男女をば

死後の光榮

強盛の信を勸む

氷は水より出

青は藍より出

肩に荷ひ背に負へきよし。經文に見ゆて候上へ。鳩摩羅珠三藏に申せし人をば。木像の釋迦負せ給ひて候しぞかし。日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ひぬ。昔と今と一同也。各は日蓮が檀那也。争か佛に成せ給はざるべき。何なる男を爲夫給ふ。こも法華經の敵ならば。隨ひ給ふべからず。彌強盛の御志あるべし。氷は水より出たれ。こも水よりも凄冷し。青き事は藍より出たれ。こも重ねれば。藍よりも色まさる。同し法華經にては御座すれ。こも志を重ねれば。他人よりも色まさり。利生もあるべき也。木は火に焼かるれ。こも梅檀の木は焼けず。火は水に消さるれ。こも佛の涅槃の火は消へず。華は風に散れ。こも淨居の華は萎まず。水は大旱魃に失れ。こ

未來の
爲に信
を勸む

も黄河に入りぬれば失せず。檀彌羅王と申せし悪王は月氏の僧の頸を切りしに失無りしかども。師子尊者の頸を切りし時刀と手と共に一時に落ちにき。弗沙蜜多羅王は鷄頭摩寺を焼し時十二神の棒に頭われにき。今日本國の人人は法華の敵と成りて身を亡ほし國を亡ほしぬる也。かう申せば日蓮が自讃也と心得ぬ人は申也。さにはあらず是を云はずば法華經の行者にはあらず。又云ふ事の後に合はこそ人も信ずれ。かう唯書置なばこそ未來の人は智ありとは知り候はんずれ。又身輕法重死身弘法と宣て候はば身は輕ければ人は打はり悪むとも法は重ければ必弘まるべし。法華經弘まるならば死屍還て重くなるべし。屍重くな

身輕
法重

肉死
靈活

るならば此の屍は利生あるべし。利生あるならば今の八幡大菩薩と齋祀るく様にいはうべし。其時は日蓮を供養せる男女は武内若宮なんごの様に崇めらるべしと思食せ。建治元年八月四日

第七 慈悲篇

聖祖の
大慈悲

文王の
禮孝

始皇の
左道

○報恩鈔内一五七例せば風に隨て波の大小あり薪に因て火の高下あり池に隨て蓮の大小あり雨の大小は龍による。根深ければ枝繁し源遠ければ流れ長しと云ふこれ也。周の代の七百年は文王の禮孝による秦の世程も無し始皇の左道なり。日蓮か慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は万年の外未來までも流布すべし。日

本國の一切衆生の盲目を開ける功德あり。無間地獄の道を塞ぎぬ。此功德は傳教天台にも超へ龍樹迦葉にも過れたり。極樂百年の修行は穢土の一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。是偏へに日蓮が智の賢きにはあらず時のしからしむる耳。春は花さき秋は菓なる夏は温かに冬は寒し。時のしからしむるに有らずや。○されば花は根にかへり眞味は土にござまる。此功德は故道善房の聖靈の御身に聚るべし。建治二年七月二十二日

○諫曉八幡鈔續内三三十四今日蓮去建長五年四月二十八日より今年弘安三年十二月に至るまで二十八年が間。又他事なし只妙法蓮華經の七字五字を日本國の一切衆生の口に入れんと勵む計り

母の慈悲に比す

也。此れ即母の赤子の口に乳を入れんと勵む慈悲也。○涅槃經云、一切衆生受異苦、悉是如來一人、苦等云云。日蓮云、一切衆生受一切苦、悉是日蓮一人、苦と申すべし。弘安三年十二月

智解と慈悲

○開目鈔續内七三今末法の始め二百餘年也。況滅度後の光に鬪諍の序と成るべき故に。非理を前として濁世の驗に召合せられずして流罪乃至壽にも及ばんとする也。されば日蓮が法華經の智解は天台傳教には千万が一分も及ぶ事なれども。難を忍び慈悲の勝れたる事は恐れをも懷ぬべし。文永九年三月十三日

第八 信仰篇

信心を器に譬ふ

○秋元書内二九二一筒御器一具付並蓋付送給候畢御器申はうつはものご讀候。大地くほければ水たまる青天淨ければ月澄り。月出ぬれば水淨し雨降ば草木昌へたり。器は大地のくぼきが如し。水溜るは池に水の入が如し。月の影を浮ぶるは法華經の我等が身に入せ給が如し。器に四の失あり一には覆覆と申てうつぶける也。又はくつがへす又は蓋をたほふ也。二には漏漏と申て水もる也。三には汙汙と申てけがれたる也。水淨けれども糞の入たる器の水をば用る事なし。四には雜也。飯に或は糞或は石或は沙或は土なんごを雜へぬれば人食ふ事なし。器は我等が身心を表す。我等が

器の失

信する日捨つる月

王后民ぐと歸つ失

心は器の如し口も器耳も器なり。法華經と申は佛の智惠の法水を我等が心に入ぬれば。或は打返し或は耳に聞じ左右の手を二の耳に覆ひ或は口に唱へじ吐出しぬ譬は器を覆するか如し。或は少し信する様なれども又惡縁に値て信心うすくなり或は打捨。或は信する日はあれども捨る月もあり是は水の漏が如し。或は法華經を行ずる人の一口は南無妙法蓮華經一口は南無阿彌陀佛なんご申は飯に糞を雜へ沙石を入たるが如し。法華經の文に但樂受持大乘經典乃至不受餘經一偈等説は是也。世間の學匠は法華經に餘行を雜ても苦しからす思へり日蓮もさこそ思候へごも經文は不爾譬は後の大王の種子を妊めるが又

完器

民ごごつけば王種ご雜て天の加護ご氏神の守護ごに被捨其國破るる縁ごなる。父二人出來れば王にもあらず民にもあらず人非人也。法華經の大事ご申は是也。○此覆漏汗雜の四の失を離て候器をば完器ご申て全き器也。塹堤漏ざれば水失事なし。信心の心全ければ平等大慧の智水乾く事なし。弘安三年正月

法華經
まに身を
まかす

飢渴
病戀
樂人

○上野殿御返事經外一八四五 兎に角に法華經に身をまかせ信ぜさせ給へ。殿一人に限るべからず信心をすくめ給て過去の父母等を救せ給へ。日蓮生れし時よりいまに一日片時も心安き事はなし。此法華經の題目弘めんご思計なり。○飢て食をねがひ渴して水を慕ふか如く。戀て人を見たきが如く。病に藥を頼が如く。美貌人

紅粉を付る如く法華經には信心をいたさせ給へ。さなくしては後悔あるべし。弘安二年四月二十日

夫妻
相親
相愛

女の鏡

己心の
妙法を
信す

○妙一尼御前御返事經外二九四五 夫信心ご申は別にはこれなく候。妻の夫をわしむか如く。夫の妻に命を捨るか如く。親の子を捨さるが如く。子の母に離れさるか如くに。法華經釋迦多寶十方の諸佛菩薩諸天善神等に信を入奉て南無妙法蓮華經ご唱へ奉るを信心ごは申候也。しかのみならず正直捨方便不受餘經一偈の經文を女の鏡を捨さるが如く。男の刀をさすが如く。少も捨る心なく案し給ふべく候。穴賢穴賢弘安三年五月

○一生成佛鈔經外二七六 但妙法蓮華經ご唱へ持つご云こも。若己心の

外に法ありと思はば全く妙法にあらず麤法なり。○故に妙法を唱へ蓮華を讀ん時は我一念を指て妙法蓮華經を名くるぞ深く信心を發すべきなり。都て一代八万の聖教三世十方の諸佛菩薩も我心の外に有るはゆめゆめ思ふべからず。然れば佛教を習ふといへども。心性を觀ぜざれば全く生死を離るゝ事なきなり。若し心外に道を求て万行万善を修せんは。譬ば貧窮の人日夜に鄰の財を計へたれども半錢の得分もなきが如し。○又衆生の心穢れぬれば土も穢れ心清ければ土も清しとて。淨土と云ひ穢土と云も土に二の隔なし。只我等が心の善惡によること見ゆたり。衆生と云も佛と云も亦如此。迷時は衆生と名け悟時は佛と名けたり。

鄰家の實を數ふる勿れ
淨穢は心に在り

開鏡と明鏡

譬ば開鏡を磨きぬれば玉も見ゆるが如し。只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。是を磨かば必法性眞如の明鏡と成べし。深く信心を發して。日夜朝暮に又懈らず磨くべし。何様にして磨くべき。只南無妙法蓮華經を唱へ奉を。是を磨くは云なり。建長七年

淨心信敬

三方相應

○持法華問答鈔卷二十一一切衆生皆成佛道の教なれば上根上機は觀念觀法も然るべし。下根下機は唯信心肝要なり。されば經には淨心信敬不生疑惑者不墮地獄餓鬼畜生生十方佛前と説給へり。いかにも信じて次の生の佛前を期すべき也。譬は高き岸の下に人ありて登る事あたはざらん。又岸の上に人ありて繩をたろして。此繩にこりつかば我岸の上に引登さん。と云はん。人に引、人の

力を疑ひ繩の弱からん事をあやぶみて手を納て是をこらさらんが如し。争か岸の上に登る事をうべき。若其詞に随ひて手をのべ是をこらへば即登る事をうへし。唯我一人能爲救護の佛の御力を疑ひ。以信得入の法華經の教への繩をあやぶみて。決定無有疑の妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず。菩提の岸に登る事難かるべし。不信の者は墮在泥梨の根元也。されは經には生疑不信者。則當墮惡道と説れたり。受がたき人身をうけ値がたき佛法に値奉て争か虚くて候へきぞ。同く信を取ならば又大小權實のある中に。諸佛出世の本意衆生成佛の直道の一乘をこそ信ずべけれ。持つ處の御經の諸經に勝れてましませば。能持つ人も亦諸人に

不信
墮獄

まされり。爰を以て經云。能持是經者。於一切衆生中亦爲第一。と説給へり。弘長三亥年

以信
得入

○聖愚問答鈔外經五八一 譬諭品云。汝舍利弗尙於此經以信得入。非已智分。況餘聲聞。文の心は大智舍利弗も法華經には信を以て入る其智分の力にはあらず。況や自餘の聲聞をや。こ也。されば法華經に來て信ぜしかば永不成佛の名を削て華光如來となり。嬰兒に乳を舍に其味を知されとも自然に其身を生長す。醫師が病者に藥を與ふるに病者藥の根源を知らず。こいへごも服すれば任運に病愈ゆ。若藥の源を知らず。こ云て醫者の與ふる藥を服せずば其病愈へしや。藥を知るも知ざるも服すれば病の愈る事以て是同じ。

良醫
良藥
病者

既に佛を良醫と號し法を良藥に譬へ衆生を病人に譬ふ。されば
如來一代の教法を擣篋和合して妙法一粒の良藥に丸ぜり。豈知
るも知ざるも服せん者煩惱の病愈ざるべしや。病者は藥をも知
ず病をも辨へずといへども服すれば必愈ゆ。行者も亦然也。法理
をも知ず煩惱をも知す云へども。只信すれば見思塵沙無明の
三惑の病を同時に斷じて實報寂光の臺に登り本有三身の膚を
磨ん事疑あるべからずされば傳教大師云。能化所俱無。歷劫妙法
經力即身成佛也。法華經の法理を教へん師匠も又習はん弟子も
久しからずして法華經の力をもて俱に佛になるべし云ふ文
也。○立義には名體宗用教の五重立を建立して妙法蓮華經の五

三惑
同斷

信仰
綱領

字の機能を判釋す。五重立を釋する中の宗の釋云。如提綱維無目
而不動牽衣一角無縷而不來。意は此妙法蓮華經を信仰し奉る一
行に功德として來らざる事なく善根として動かざる事なし。譬
ば綱の目無量なれども一の大綱を引くに不動目もなく衣の絲
筋巨多なれども取一角絲筋として來らざるこそなきが如しと
云義也。文永二年

信は佛
道の根
本

○法華題目鈔內五十三正眞捨方便の法華經には以信得入と云。雙林
最後の涅槃經には是菩提因雖復無量若說信心則已攝盡等云云。
夫佛道に入る根本は信を以て本とす。五十二位の中には十信を
本とす。十信の位には信心初也。假令解なれども信心あらん者

鈍根も正見も有解無信

は鈍根も正見の者也。假令さごりあれども信心なき者は誹謗闢提の者也。善星比丘は二百五十戒を持って四禪定を得十二部經を諳にせし者也。提婆達多は六万八万の寶藏を覺へ十八變を現せしかごも。此等は有解無信の者也。今に阿鼻大城にありと聞く。又鈍根第一の須梨槃特は智慧もなく悟もなし只一念の信ありて普明如來と成給ふ。又迦葉舍利弗等は有解有信の者也。佛に授記を蒙て華光如來光明如來といはれき。佛説云、生疑不信者即當墮惡道等云云。此等は有解無信の者を皆惡道に墮すべしと説給也。而に今の代の世間の學者の云、只信心計にて解心なく南無妙法蓮華經と唱る計にて争か惡趣を免るべき等云云。此人人は經文

有解

不信
墮獄

但信
口唱

の如ならば阿鼻大城を免れがたし。さればさせる解なくとも南無妙法蓮華經と唱るならば惡道を免るべし。文永三年正月

隨力
演説

臨終の時
妙覺の山に
登る

○松野殿御返事經外二五三八然に在家の御身は但餘念なく南無妙法蓮華經と御唱ありて僧をも供養し給が肝心にて候也。それも經文の如くならば隨力演説も有べき歟。世の中もの憂からん時も今生の苦さへかなしし。況や來世の苦をやと思食ても南無妙法蓮華經と唱へ。悦ばしからん時も今生の悦は夢の中の夢。靈山淨土の悦こそ實の悦なれと思食合せて又南無妙法蓮華經と唱へ。退轉なく修行して最後臨終の時を待て御覽ぜよ。妙覺の山に走り登て四方をきつと見るならば。あら面白や法界は寂光土にし

て瑠璃を以て地とし金の繩を以て八の道を界へり天より四種の花ふり虚空に音樂聞ゆて。諸佛菩薩は常樂我淨の風にそよめき娛樂快樂し給そや。我等も其數に列りて遊戯し樂むべき事はや近づけり信心弱くしてはかくる目出度所に行へからず行へからず。建治二年二月

信心に
水
火
あり

●上野殿御返事外ニ、七、九抑も今の時法華經を信ずる人。或は火の如く信する人もあり或は水の如く信する人もあり。聽聞する時は燃立ばかり思へとも遠ざかりぬれば捨る心あり。水の如くこそ申はいつも退せず信する也。此はいかなる時も常に退せずこそわせ給へば水の如く信ぜさせ給へる歟。尊し尊し實やらむ家の内

所願成
就は信
心依
る

に煩ひの候なるはよも鬼神の所爲には候はじ。十羅刹女の信心の分際を御心みぞ候らむ。實の鬼神ならば法華經の行者を惱まして頭を破んと思ふ鬼神の候へき歟。又釋迦佛法華經の御虚事の候へきかこ。深く思食候へ。建治四年二月

●日嚴尼御返事外ニ、三弘安三年十一月八日。日嚴の立申立願の願書並に御布施の錢一貫文又太布帷子一つ。法華經の御寶前並に日月天に申上候畢ぬ。其上は私に計り申に及ばず候。叶ひ叶はぬは御信心により候へし全く日蓮が科にあらず。水澄めば月うつる風吹ば木ゆるぐ如く。みな御心は水の如し。信の弱きは濁るが如く。信心のいさぎよきは澄るが如し。木は道理の如し。風

以信代慧

のゆるがすは經文を讀か如しこ思食せ。恐恐弘安三年十一月
○四信五品鈔内五十六問入末法初心行者必具圓三學不答曰此義
爲大事故勸出經文送付貴邊所謂五品之初二三品佛正制止戒定
二法一向限慧一分慧又不堪以信代慧信一字爲詮不信一闡提謗
法因信慧因名字即位也。

信大利 無疑曰 信價解 實以信買 慧

○御義口傳上八十御義口傳云一念三千信一字起三世諸佛成道信
一字より起也此信字元品無明所切利劍也其故信無疑曰信疑惑
斷破利劍也解者智慧異名也信如價解如寶三世諸佛智慧買信一
字也智慧者南無妙法蓮華經也信智慧因名字即位也信外無解解
外無信信一字以妙覺種子定文

第九 修行篇

三業讀誦

○土籠御書外十一日蓮は明日佐渡國へまかるなり今夜の寒ひやに付
ても牢の内のありさま思遣れて痛いたくこそ候へ。あはれ殿は法華
經一部を色心二法共に遊したる御身なれば父母六親一切衆生
を助け給へき御身也。法華經を餘人の讀み候は口計り言計りは
讀めども心に讀ず。心は讀ごも身に讀ず。色心二法共に遊された
るこそ貴く候へ。天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害と説れて
候へば別の事は有へからず。籠をばし出させ給候はごくごく
來り給へ。見奉り見ぬ奉ん。恐恐謹言文永八年十月九日

常行唱題

○十章鈔内七十五眞實に圓の行に順じて常に口ずさみにすべき事

智者
觀法

受持
一行

受持
成佛

才覺
無益

は南無妙法蓮華經なり。心に存すべき事は一念三千の觀法なり。これは智者の行解なり日本國の在家の者には但一向に南無妙法蓮華經を唱へさすべし。名は必體にいたる徳あり。文永八年五月

○御義口傳下三十一第八畢竟住一乘○決定無有疑事 御義口傳云畢竟者廣宣流布也。住一乘者南無妙法蓮華經一法可住者也。是人者名字即凡夫也。佛道者究竟即也。疑者根本疑惑指無明也。末法當今此經受持一行計可成佛定也。弘安元年正月一日

○御義口傳下六十一品品初五字題終以五字結前後中間南無妙法蓮華經七字也。末法弘通要法唯此一段有之也。此等心失要法不結末法弘通法不足者也。剩可失日蓮本意日蓮弟子檀那別才覺無益也。

妙樂釋云、子弘父法有世界益矣。子者地涌菩薩也。父者釋尊也。世界者日本國益者成佛也。法者南無妙法蓮華經也。今又以如此。父者日蓮也。子地日蓮弟子檀那也。世界者日本國也。益者受持成佛也。法者上行所傳題目也。

異體
同心

殷紂
周武

○異體同心事續內一三五異體同心なれば万事を成じ。同體異心なれば諸事叶ふ事なし。申事は外典三千餘卷に定りて候。殷の紂王は七十万騎なれども同體異心なれば軍に敗ぬ。周の武王は八百人なれども異體同心なれば勝ぬ。一人の心なれども二の心あれば其心違て成ずる事なし。百人千人なれども一つ心なれば必ず事を成ず。日本國の人人は多人なれども同體異心なれば諸事成

ぜん事難し。日蓮が一類は異體同心なれば。人人少く候へども大事を成じて。一定法華經弘りなんど覺へ候。悪は多けれども一善に勝事なし。譬へば多くの火集れども一水には消へぬ。此一門も又かくの如し。文永十一年八月六日 與太田氏書

異體異心

城者城を破る

○生死一大事血脉鈔外十三總じて日蓮か弟子檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して。異體同心にして南無妙法蓮華經を唱奉る處を生死一大事の血脉とは云也。然も今日蓮が弘通する處の所詮是也。若然者廣宣流布の大願も可叶者歟。剩へ日蓮が弟子の中に異體異心の者有之。例せば城者として城を破るが如し。

文永九年二月十一日

専心修行を願ふ

所領を愛む勿れ

湯に水を入が如し

唱題の功德

○種種御振舞鈔納三十三各我弟子となりん人人は一人も臆し思ふべからず。親を思ひ妻子を思ひ所領を願ふ事勿れ。無量劫より已來親子のため所領に命を捨たる事は大地微塵よりも多し。法華經ゆへにいまだ一度も捨ず。法華經をば若干行せしかどもかゝる事出来せしかば退轉して止にき。譬ば湯を沸して水に入れ火を切るに遂ざるか如し。各思ひ切り給へ此身を法華經にかうるは石に金をかへ糞に米をかうるなり。建治二年

○松野殿御返事外五三御文に云く此經を持ち申て後退轉なく十如是自我偈を讀奉り題目を唱へ申候也。但し聖人の唱させ給ふ題目の功德と我等が唱へ申題目の功德と何程の多少候べき

智愚

金と燈
火の如し

十四
誹謗

名利
墮獄

やご云云。更に勝劣あるべからず候。其故は愚者の持たる金も智者の持たる金も愚者の燃せる火も智者の燃せる火も其差別なき也。但し此經の心に背て唱へば其差別有べき也。此經の修行に重重の品あり。其大概を申ば記五云。明惡數者。今文云。說不說耳。有人分此云。先列惡因。次列惡果。惡因十四。一憍慢。二懈怠。三計我。四淺識。五著欲。六不解。七不信。八攀躑。九疑惑。十誹謗。十一輕善。十二憎善。十三嫉善。十四恨善也。此十四誹謗は在家出家に亘るべし。可恐可恐。○何に賤者なりとも少し我より勝れて智惠ある人には此經のいはれを問ひ尋給へし。然るに惡世の衆生は我慢偏執名聞名利に著して。彼が弟子と成べき歟。彼に物を習はば人にや賤く思

はれんずらん。不斷惡念に住して惡道に墮すべし。建治二年十二月九日

次の參
者を誠

神は所
從法華
經は君

次參者
の放逐

聖祖の
誠告

○三澤鈔内一七六九又内房の御事は御年老給て御渡りありし痛敷思ひ參せ候しかごも。氏神へ參てある次候しかば。見參に入るならば定て罪深かるべし。其故は神は所從なり。法華經は主君なり。所從のついでに主君への見參は世間にも恐れ候。其上尼の御身になり給ては先佛を先とすべし。かたがたの御失ありしかば見參せず候。此又尼御前一人には限ず。其外の人人も下部の温泉ついでに申者をあまた追返して候。尼御前は親の如くの御齡なり。御嘆き痛敷候しかごも。此義を知らせ參せん爲なり。建治四年二月二十三日

○四條金吾殿御返事内一六三四構へて構へて此間は餘の事なりと

道理は
主に勝

も御起請書せ給ふべからず。火はをびたぐしき様なれども暫く
あれば滅る水は鈍き様なれども無左右失ひ難し。御邊は腹あし
き人なれば火の燃るが如し一定人に賺れなん。又主の遅々言
和かに賺させ給ふならば火に水をかけたる様に御渡りありぬ
ご覺ゆ。鍛はぬ金は盛んなる火に入るれば疾蕩候氷を湯に入れ
るが如し。劔なんごは大火に入るれども暫はごけず是れ鍛へた
る故也。前にかう申は鍛ふなるべし。佛法ご申は道理也道理ご申
は主に勝物也。何に愛し離れじご思ふ妻なれども死しぬれば甲
斐なし。何に所領を惜しごをばすごも死しては他人の物。既に榮
て年久し少も惜む事なかれ。又先々申が如く先先よりも百千万

聖祖唯
佛に成
んと願

四條の
決心

億倍御用心あるべし。日蓮は少より今生の祈なし只佛に成んご
思ふ計り也。されご殿の御事をばひまなく法華經釋迦佛日天に
申す也。其故は法華經の命を繼ぐ人なればご思ふ也。穴賢穴賢
○四條金吾殿御返事内二六十七去月二十五日の御文同月二十七日
の酉の時に來て候。仰下さるゝ状ご又起請かくまじき由の御誓
状ごを見候へば。優曇華の咲たるを見るか。赤梅檀の嫩葉になる
をねたるか。珍し香し。○設日蓮一人は杖木瓦石悪口王難をも忍
ぶごも妻子を帶せる無智の俗なんごは争か可叶。中々信せざら
んはよかりなん。末通ず暫時ならば人に笑れなんご不便に思ひ
候しに。度々の難二箇度の御勸氣に心ざしをあらはし給ふだに

所領の
抛棄の

も不思議なるに。かくをござるくに二所の所領を捨て法華經を
信じ通すべし。御起請候事何にとも申す計りなし。○只事の心
を案ずるに日蓮か道をたすけん。上行菩薩貴邊の御身に入替
らせ給へるか。又教主釋尊の御計ひか。○結句は多の所領男女の
公達御前等を捨て、御遁世と承はる。殿は子なし頼母敷兄弟な
し。讒かの二所の所領なり。一生は夢の上明日を期せず。何なる乞
食にはなるとも法華經にきずをつけ給ふべからず。されば同く
は歎きたる氣色なくて。此狀に書たるか如く少も詔はず振舞仰
せあるべし。中々詔ふならば悪しかりなん。設ひ所領をめされ追
出し給ふとも十羅刹女の御計ひにてぞ有るらん。深く恃ませ

一生は
夢の如し

三位公
陳狀を
致す

給ふべし。○陳狀は申して候へども又それに僧は候へども餘り
の覺束なきに三位房を遣すべく候に。いまだ所勞きらきらく
候はず候へば同事に此御房を參らせ候。大學三郎殿瀧の太郎殿
か富木殿かに暇に隨ひ書せて上させ給ふべし。○かへすがへす
奉行人に詔ふ氣色なかれ。○御寄合あるべからず。夜は用心きび
しく夜廻の殿原語まはらごて用ひ常には寄合るべし。今度御内をだにも
いだされずば十に九は内のものねらひなむ。構へてきたなき死
にすべからず。建治三年七月

聖祖の
色説

○上野殿御返事外二、八四、五次に勸持品に八十万億那由佗の菩薩の
異口同音の二十行の偈は日蓮一人讀めり。誰か出でて日本園唐

刀杖の
二讀

土天竺三國にして佛滅後に讀たる人やある。又我讀たりと名乗
るべき人なし。又有へしとも覺へず。及加刀杖の二字の中にも杖
の字に値ふ人はあるべし。刀の字に値たる人を聞かず。不輕菩薩
は杖木瓦石と見へたれば杖の字に値ぬ。刀の難は聞かず。天台妙
樂傳教等は刀杖不加と見へたれば是又かけたり。日蓮は刀杖の
二字共に値ぬ。剩へ刀の難は前に申が如く東條の松原と龍口と
なり。一度も値人なき也。日蓮は二度値ぬ。杖の難には既に少輔房
に面を打れしかども第五卷を以て打つ。打つ杖も第五卷打るべ
しと云ふ經文も五卷不思議なる未來記の經文也。弘安三年四月二十日

勸持の
色讀

○開目鈔上内七二而に法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は

法華の
記文

日蓮だにも此國に生れずば。殆ど世尊は大妄語の人八十萬億那
由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ぬべし。經に云く有諸無智人
惡口罵詈等。加刀杖瓦石等云云。今の世を見るに日蓮より外の諸
僧誰の人か法華經に付て諸人に惡口罵詈せられ刀杖等を加ら
るゝ者ある。日蓮なくば此一偈の未來記は妄語となりぬ。惡世中
比丘邪智心詔曲又云、與白衣說法爲世諸恭敬如六通羅漢。此等の
經文は今の世の念佛者禪宗律宗等の法師なくば世尊は又大妄
語の人。常在大衆中乃至向國王大臣婆羅門居士等。今の世の僧等
日蓮を讒奏して流罪せずば此經文虚し。又云、數々見擯出等云云。
日蓮法華經の故に度流されずば數數の二字如何せん。此の二

數々の
二字

諸經の
記文

聖祖佛
語を助
す

字は天台傳教も未だ讀み給はず況や餘人をや。末法の初の兆し
 恐怖惡世中の金言の値ふ故に但日蓮一人此を讀り例せば世尊
 が付法藏經に記云、我滅後一百年に阿育大王と云ふ王あるべし。
 摩耶經云、我滅後六百年に龍樹菩薩と云ふ人南天竺に出づべし。
 大悲經云、我滅後六十年に末田地と云ふ者地を龍宮に築くべし。
 此等皆佛記の如くなりき。然らずは誰か佛敎を信受すべき。而る
 に佛、恐怖惡世然後末世末法滅時後五百歲なんど正妙二本に正
 く時を定め給ふ。當世法華經の三類の強敵なくば誰か佛説を信
 受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として佛語を助ん。南三
 北七七大寺等猶像法の法華經の敵の内何況。當世の禪律念佛者

等は脱へしや。經文に我身符合せり御勸氣を蒙れば彌悦ひを増

へし。文永九年二月

懺悔滅
罪海
小針水
に沈み

大石海
に浮ぶ

諸師の
懺悔

嘉祥と
妙樂

○光日房御書縮内一四二夫針は水に沈む雨は空に止まらず。蟻子を
 殺せる者は地獄に入り死に屍を切れる者は惡道を免かれず。何
 況人身を受たる者を殺せる人や。但し大石も海に浮は船の力也。
 大火も消る事は水の用にあらずや。小罪なれども懺悔せざれば
 惡道を免がれず。大逆なれども懺悔すれば罪きへぬ。建治二年三月

○報恩鈔下縮内二四八七嘉祥大師は法華立と申文十卷造りて法華經
 を褒しかども妙樂彼を攻めて云、毀在其中何成弘讚等云云法華
 經を破る人也。されは嘉祥は落て天台に仕て法華經を讀ず。我れ

慈恩と傳教

嘉祥の懺悔

世親の懺悔

馬鳴の懺悔

經を讀ならば惡道免れ難しとて七年まで身を橋とし給ひき。慈恩大師は立替と申て法華經を褒る文十卷あり。傳教大師攻て云、雖讚法華經還死法華心等云云。此等を以て惟ふに法華經を讀み讚歎する人人の中に無間地獄は多く有る也。嘉祥慈恩既に一乘誹謗の人ぞかし弘法慈覺智證あに法華經蔑如の人にあらずや。嘉祥大師の如く講を廢し衆を散じて身を橋となせしも猶や己前の法華經誹謗の罪や消へざるらん。不輕輕毀の者は不輕菩薩に信伏隨從せしかども重罪いまだ残りて千劫阿鼻に墮ぬ。○世親菩薩馬鳴菩薩は小を以て大を破せる罪をば舌を切らんこそせしか。世親菩薩は佛説なれども阿含經をば戯れにも舌の上

に置じと誓ひ。馬鳴菩薩は懺悔の爲に起信論を造て小乘を破り給き。嘉祥大師は天台大師を請し奉りて百餘人の智者の前にして。五体を地に投げ徧身に汗を流し紅の涙を流して。今より弟子を見じ法華經を講ぜじ。弟子の面を守り法華經を讀奉れば我力の此經を知るに似たりとて。天台よりも高僧老僧にて御座せしが。わざと人の見る時負ひ參せて河を超へ。高坐に近づきて背に參せて高座に登せ奉り。結句御臨終の後には隋の皇帝に參らせ。て小兒が母に後れたるが如くに足をすりて泣き給ひしなり。嘉祥大師の法華立を見るにいたう法華經を謗したる疏にはあらず。但法華經と諸大乘經とは門は淺深あれども心は一と書きて

法華の謗本

苦行時に依る

こそ候へ。此が謗法の根本にて候か。建治二年七月

○日妙聖人御書内三九樂法梵志雪山童子等の如く皮を剥はべきか身を投ぐべきか臂を焼くべきか等云云。章安大師云、取捨得宜テ不可レ一向等此れ也。正法を修して佛に成る行は時に依るべし。日本國に紙なくば皮を剥くべし。日本國に法華經なくて知れる鬼神一人出來せば身を投ぐべし。日本國に油なくば臂をも燃もすべし。厚き紙國に充滿せり皮を剥で何かせん。文永九年五月二十五日

第十生死篇

六道輪廻

○聖愚問答鈔外五四二悲哉痛哉我等無始より已來無明の酒に酔て

人界八苦

六道四生に輪回して。或時は焦熱大焦熱の炎にむせび或時は紅蓮大紅蓮の氷にこじられ。或時は餓鬼飢渴の悲みに値て五百生の間飲食の名をも聞ず。或時は畜生殘害の苦を受て小きは大きなるにのまれ短きは長きにまかる是を殘害の苦と云。或時は修羅鬪諍の苦をうけ。或時は人間に生れて八苦をうく。生老病死愛別離苦怨憎會苦求不得苦五盛陰苦等也。或時は天上に生れて五衰をうく。如是、三界の間を車輪の如く回り。父子の中にも親の親たる子の子たる事をさざらず夫婦の會あ遇あたる事をしてらず。迷へる事は羊目に等く暗き事は狼眼に同じ。我を生たる母の出來をも知らず生を受たる我身も死の終りをしらず。嗚呼難

受け難き人身難
値ひ難き理効

受人界の生をうけ難値如來の聖教に値奉れり一眼の龜の浮木の穴にあへるが如し。今度若生死のきつなをきらず三界の籠樊を出ざらん事悲かるべし悲かるべし。文永二年

生死の二法

妙生死法
一心の妙用
法性の起滅

○生死一大事血脉鈔外三夫生死一大事血脉者所謂妙法蓮華經是也。其故は釋迦多寶二佛寶塔の中にして讓上行菩薩給此妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已來寸時も不離血脉也。妙死法生也此生死の二法が十界の當體也。又此云當體蓮華也。○傳教大師云生死二法一心妙用有無二道本覺眞徳文天地陰陽日月五星地獄乃至佛果生死二法に非ず云ここなし如是生死も唯妙法蓮華經の生死也。天台止觀云起是法性起滅是法性滅云云釋迦多寶

三世の生死

二佛も生死の二法也。然者久遠實成の釋尊と皆成佛道の法華經と我等衆生との三全無差別解て妙法蓮華經と唱奉る處を生死一大事の血脉とは云ふ也。○過去の生死現在の生死未來の生死三世の生死に法華經を不離切法華の血脉相承とは云ふ也。謗法不信の者は即斷一切世間佛種とて佛に成べき種子を斷絶するが故に生死一大事の血脉無之也。○日本國の一切衆生に法華經を信ぜしめて佛に成る血脉を繼しめんとするに。還て日蓮を種の難に合せ結句此島まで流罪す。而るに貴邊日蓮に隨順し又難に値給事心中思遣られて痛しく候ぞ。○過去の宿緣追ひ來て今度日蓮が弟子と成り給歟。釋迦多寶こそ御存知候らめ。在在諸

正臨終
念終

佛土常與師俱生よも虚事候はじ殊に生死一大事の血脉相承の御尋先代未聞の事也。○相構相構て強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經臨終正念と祈念し給へ。生死一大事の血脉此より外に全く求るること勿れ。煩惱即菩提生死即涅槃とは是なり。信心の血脉なくんは法華經を持とも無益なり委細之旨又又可申候。恐恐謹言 文永九年二月十一日

常生
住死

止觀の
明文

○色心二法鈔經外註此生死六道四生二十五有に廻りて輪廻今に不絶。然るに佛は此生死を離るるを以て佛と云ふ。此生死に遷り迷ふを以て凡夫と云也。○止觀五云。無明痴惑。本是法性。以痴迷故。法性變作無明。起諸顛倒。善不善等。如寒來結水。變作堅氷。又如眠來

十二月
縁は十二
因縁

變心有種種夢。今當體諸顛倒。即是法性。不一不異。雖顛倒起滅。如火輪。不信顛倒起滅。唯信此心。但是法性起。是法性起滅。是法性滅。體其實不起滅。妄謂起滅云云。○此釋意は我等がいこひ悲める生死は法身常住。妙理にて有ける也。譬は我等が生死と云へるは過行。日月に付て生死は有也。○故に一年十二月は十二因縁の生死也。正月生位より十二月老死滅位に至る。又此滅の位より生の種を ついで十界の因果三世不改。十界の生死は過行。日月にて有也。又我等衆生の身のみならず。草木も皆此日月の明暮生死に移れて我等と俱に生生死死する也。譬は生ずるは心法也。滅するは色法也。色心の二法が不二也と云ば。譬はもみを種にたろすにもみは

種子苗と成る

去年の菓なれば心法也。此心法を今年種に下すに此種子成苗。心成色。故心法の形不見。但色法のみなり。雖然此色法の全體は心法なる故に日月の過行に隨て生長する也。故に色心不二也。色心不二なりといへども又而二也。此色法の苗の中より秋に至て又本の心法を生ずる也。故に不二にして而二也。如是十界の依正色心の二法。一法二義の理にして。生死常住の故に三世に改まる事なし。寛元二年九月十七日

釋尊の不滅

○守護國家論續内二十四天台大師立義八云。手不執卷。常讀是經。口無言聲。徧誦衆典。佛不說法。恆聞梵音。心不思惟。普照法界。此文意。手不執法華經一部八卷。信是經人。晝夜十二時持經者也。口不出讀誦聲。

釋尊の不死

信法華經者。日日時時念念讀一切經者也。佛入滅既經二千餘年。雖然信法華經者。許留佛音聲時時刻刻念念令聞我不死。由心不觀一念三千。徧照十方。法界者也。此等德徧備行法華經者也。是故信法華經者。設臨終時。心不念佛。口不誦經。不入道場。無心照法界。無音誦一切經。不取卷軸。拳法華經八卷。德有之。是豈非權教念佛者。期臨終正念欲唱十念念佛者。勝百千万倍之易行乎。正元元年

無常の勸化

○持妙法華問答鈔續内三十一暮行空の雲の色有明方の月の光までも心をもよほす思也。事にふれ折に付ても後世を心にかけて。花の春雪の朝も是を思ひ。風戰村雲まよふ夕にも忘るゝ隙なかれ。出る息は入る息を待ず。何なる時節ありてか。毎自作是念の悲願を忘

臨終今
に在り

我慢
偏執

生涯は
假の宿

れ。何なる月日ありてか無一不成佛の御經を持たざらん。昨日が今日になり去年の今年となる事も。是期する處の餘命にはあらざるをや。總て過にし方を數へて年の積るをは知こいへとも。今行末にをいて一日片時も誰か命の數に入へき。臨終已に今にありこは知ながら。我慢偏執名聞利養に著して妙法を唱へ奉らざらん事は。志の程無下にかひなし。さこそは皆佛道の御法とは云ながら。此人争か佛道にもものうからざるべき。色なき人の袖にはそぞろに月の宿る事かは。又命已に一念にすぎざれば佛は一念隨喜の功德と説給へり。若是二念三念を期すこ云はば。平等大慧の本誓頓教一乘皆成佛の法とは云はるべからず。○生涯幾くな

無常
眼前

らず。思へば一夜のかりの宿を忘れて幾くの名利をか得ん。又得たりこも。是夢の中の榮へ珍しからぬ樂み也。只先世の業因に任て營むへし。世間の無常を悟ん事は眼に遮り耳にみたり。雲こやなり雨こやなりけん昔の人は只名をのみきく。露こや消ぬ煙こや登りけん今の友も又みぬず。我れいつ迄か三笠の雲こ思ふべき。春の花の風に隨ひ秋の紅葉の時雨に染る。是皆ながらへぬ世の中のためしなれば。法華經には世皆不牢固如氷沫泡焰とすくめたり以何令衆生得入無上道の御心のそこ。順縁逆縁の御ここのは已に本懷なれば。暫も持つ者も又本意にかないぬ。又本意に叶はゞ佛の恩を報する也。弘曼三亥年

聖祖の
老病の

○上野殿母尼御前御返事外二八二のふ米一駄すふ聖人一筒二十ひさ
げか、かつかう一袋ひとふら送給候畢。此處のやう前々申しふり候ぬ。さて
は去文永十一年六月十七日此山に入候て今年十二月八日に至
るまで此の山出る事一步も候はず。但し八年が間病と申齡と申
歳々に身弱く心こころ耄候つる程に。今年は春より此病起りて秋すぎ
冬に至る迄日に衰へ夜夜にまさり候つるが。此十餘日は既に
食も殆ほとんど止りて候上大雪は重り寒はせめ候。身のひゆる事石の
如し胸の冷つめき事氷の如し。然るに此酒煖あたたかに、さしわかして。かつ
かうをはたさくい切りて一度のみ候へは。火を胸にたくが如し
湯に入るに似たり。汗あせに垢か洗せんひぎに足をすくぐ。此御志しは如何

身弱く
心耄れ

聖祖の
服薬の

せんご嬉敷思候處に。兩眼より一の涙をうかへて候。弘安四年十二月八日
○中務左衛門尉殿御返事外二七九將又日蓮くわん下痢り去年十二月三十
日事起り今年六月三日四日日に度をまし月月に倍增す。定業
かご存る處に貴邊の良薬を服してより己來日日月月に減じて
今百分の一となれり。しらず教主釋尊の入替り參せて日蓮を助
給ふか。地涌の菩薩の妙法蓮華經の良薬を授け給へるかご疑ひ
候也。弘安元年六月二十六日
○觀心本尊得意鈔内三十九心地達例して候程。令省略候。○帥殿の
物語りしは下總に目連樹と云ふ木の候よし申し候し。其木の根
を掘りて十兩斗り。兩方の切目には燒金を宛てて紙にて厚く包

聖祖薬
を求む

病生死

みて風ひかぬ様に拵へて。大夫次郎が便宜に給候へき由御傳へあるべく候。建治元年十二月二十三日

○阿佛房御返事續外五九御狀旨委細承候畢。大覺世尊説曰、生老病死生住異滅等云云。既受生、齡及六旬、老又無疑、只所殘病死、二句而已。然而自正月至、今月六月一日、連々此病無息、死事無疑者歟。經云、生滅々已寂滅爲樂云云。今棄毒身後、受金色豈可歎乎。建治三年五月六日

無常遷滅

○新池御書續外三噫過し方の程なきを以て知ぬ我等が命今幾程もなき事を。春の朝に花をながめし時、伴ひ遊ひし人は花と共に無常の嵐に散りはてて名のみ残りて其人はなし。花は散ぬといへども又こん春も發くべし。されども消るにし人は亦いかなら

寒苦鳥の聲

ん世にか來るべき。秋の暮に月を詠めし時、戯れ睡し人も月と共に有爲の雲に入りて後面影ばかり身に添て物言事なし。月は西山に入るといへども亦こん秋も詠むべし。然れどもかくれし人は今いつくにか住ぬらん覺束なし。無常の虎のなく音は耳に近づくと雖も聞て驚く事なし。屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん。雪山の寒苦鳥は寒苦にせめられて夜明なば栖つくらん。こ鳴といへども日出ぬれば朝日のあたくかなるに眠り忘れて又栖をつくらずして一生虚く鳴くことをう。一切衆生も亦復如是。地獄に墮ちて炎にむせぶ時は。願くは今度人間に生れて諸事を閣ひて三寶を供養し後世菩提をたすからん。願へども偶人間

に來る時は名聞名利の風はげしく佛道修行の燈は消るやすし。無益の事には財寶を盡すに惜からず。佛法僧に少も供養をなすには是をものうく思ふ事これ只事にあらず。地獄の使の競ふ者也。寸善尺魔と申は是也。弘安三年二月

病者に
良薬に

○同鈔 相搆て如何にしても此度此經を能信じて命終の時千佛の迎ひに預り靈山淨土に走り参りて自受法樂すべし。信心弱くして成佛ののびん時某を怨みさせ給ふな。譬ば病者に良薬を與ふるに毒を好んで喰ぬれば其病愈るがたき時。我失とは思はず。還て醫師を恨むが如くなるべし。此經の信心と申は少も私なく經文の如くに人の言を用ひず法華一部に背く事無ければ佛

に成り候ぞ。佛に成り候事は別の様は候はず。南無妙法蓮華經と他事なく唱へ申して候へば天然と三十二相八十種好を備ふる也。如我等無異と申して釋尊程の佛にやすやすと成り候也。譬は鳥の卵は始めは水也。其水の中より誰がなすともなければ。よ目よと嚴り出來て虚空にかけるが如し。我等も無明の卵にして淺間敷身なれども南無妙法蓮華經の唱への母にあたくめられ参せて。三十二相の嘴出て八十種好の鎧毛生揃ひて實相眞如の虚空にかけるべし。爰を以て經云一切衆生は無明の卵に處して智慧の口ばしなし。佛母の鳥は分段同居の古栖に返りて無明の卵をたつき破りて一切衆生の鳥を巢立て法性眞如の大虚

愛別
離苦

病者
の
苦患

親子
の
別

に飛ばしむと説けり。取意有解無信とて法門をば解て信心なき者は更に成佛すべからず。有信無解とて解はなくとも信心ある者は成佛すべし。皆此經の意也。弘安三年二月

○光日房御書内二四。守人間に生を受たる人上下に付て憂患なき人は無れども。時に當り人人に従て歎き品々也。譬ば病の習ひは何の病も重く成ぬれば是に過たる病なしと思ふが如し。主の別れ親の別れ夫妻の別れ何れか愚なるべき。なれども主は又他の主も有ぬべし。夫妻は又代ぬれば心を休むる事もありなん。親子の別れこそ月日の隔るまくに彌歎き深かりぬべく見へ候へ。親子の別れにも親は往て子は留るは同じ無常なれども道理にも

竹林園
の金鳥
鹿野園
の鹿

生者
必滅

や。老たる母は留りて若き子の前立情けなき事なれば神も佛も怨めしや。何なれば親に子を代へさせ給ひて前に立させ給はず。留置せ給ひて歎けかせ給ふらん。心うし。心なき畜生すら子の別れ忍びかたし。竹林精舎の金鳥は卵の爲に身を焼鹿野苑の鹿は胎内の子を惜みて王の前に参れり。何況心あらん人にをいてをや。されば王陵が母は子の爲に頭腦を碎き。神堯皇帝の後は胎内の太子の御爲に腹を破せ給ひき。此等を思つゞけさせ給はんには。火にも入り頭をもわりて我子の形を見るべきならば惜からず。こそ覺すらめ。思遣れて涙も留らず。建治二年三月

○松野殿御返事外一五。八情世間を觀ずる生死無常の理なれば生

冥途の旅行

する者は必ず死す。されば憂世の中のあた墓無事。譬は電光の如く朝露の日に向て消るに似たり。風の前の燈の消へやすく芭蕉の葉の破れ易きに異ならず。人皆此無常を遁れず終に一度は黄泉の旅に趣くべし。然れば冥途旅を思ふに闇闇として暗ければ日月星宿の光もなく。せめて燈燭としてともす火だにもなし。かくる闇き道に又伴ふ人もなし。娑婆にある時は親類兄弟妻子眷屬集りて父は慈の志高く母は悲みの情深く。夫妻は海老同穴の契りして大海にある海老は同じ畜生なから夫妻ちきり細かに。一生一處に伴ひて離れ去る事なきが如く。鴛鴦の衾の下に枕を並べて遊ひ戯る中なれども。彼の冥途の旅には伴なふ事なし。冥冥

海老同穴

伴なく
獨り行く

老少不定

今生の貯蓄
未來の資糧

として獨り行く誰か來て是非を訪はんや。或は老少不定の境なれば老たるは先立若は留る。是は順次の道理也。歎の中にもせめて思なくさむ方も有りぬべし。老たるは留まり若きは先立つ。されば恨の至て恨めしきは幼して親に先立つ子。歎の至て歎か。きは老て子を先立つる親也。是の如く生死無常老少不定の境あだに墓無世の中に。但晝夜に今生の貯をのみ思ひ朝夕に現世の業を耳なして。佛をも敬はず法をも信せず無行無智にして徒らに明し暮して。閻魔の廳庭に引迎へられん時は何を以てか資糧として三界の長途を行き何を以て船筏として生死の曠海を渡りて實報寂光の佛土に至らん哉。建治二年十二月

先づ臨
終を習
へ

○妙法尼御前御返事縮内二七五 夫以は日蓮幼少の時より佛法を學
び候しが念願すらく人の壽命は無常なり。出る氣入る氣を待つ
事なし風の前の露尙譬にあらず。賢も愚も老たるも若きも定め
無き習也。されば先臨終の事を習ふて後に佗事を習ふへし。

弘安元年七月十四日

生死の
迷を離
れよ

○四條金吾殿御返事縮内一六三九 日蓮は少より今生の祈なし只佛に
ならんと思ふ計り也。建治三五年

○佐渡御勘氣鈔縮外七六 九月十二日に御勘氣を蒙て。今年十月十日
佐渡國へまかり候也。本より學文し候し事は佛教を究めて佛に
なり思ある人をもたすけんと思ふ。文永八年十月

後世の
大切の

○本尊問答鈔縮内一八八 佗事をすて、此所本尊の御前にして一向
に後世をも祈せ給ひ候へ。弘安元年

○日女御前御返事縮外二六三 日蓮が弟子檀那等正直捨方便乃至不
受餘經一偈と無二に信ずる故によて。此御本尊の寶塔の中へ入
るへきなり頼母し頼母し。如何にも後生を嗜み給ふへし嗜み給
ふへし。穴賢建治三年八月二十三日

靈山御
契約
の三途河
船

○波木井殿御書縮外二二四 日蓮は日本第一の法華經の行者也。日蓮
が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はゞ。梵天帝釋四
大天王閻魔法皇の御前にても。日本第一の法華經の行者日蓮房
が弟子檀那なりと名乗て通り給へし。此法華經は三途河にては

冥途の
燈火

二心の
嚴賊

船となり死出の山にては大白牛車となり冥途にては燈となり
 靈山へ參る橋也。靈山へましまして良の廊ちやうどのにて尋させ給へ必待
 ち奉るべく候。但各の信心に依るべく候。信心だも弱くばいかに
 日蓮が弟子檀那と名乗せ給ふともよも御用ひは候はじ。心に二
 つましまして信心だに弱く候はば峯の石の谷へ轉び空の雨の
 大地へ落ると思食せ大阿鼻地獄疑あるべからず。其時日蓮を恨
 みさせ給な返返も各の信心に依るべく候。大通結縁の者は地獄
 に墮て三千塵點劫を経候き。久遠下種の輩は地獄に墮て五百塵
 點劫を経たる事。大惡智識にあふて法華經を疎略そつりやくに信ぜし故也。
 返返も能能信心候て事故なく靈山へましまして日蓮を尋させ

如渡
得船

生死の
大海

以信
得入

給へ。其時委可申候。南無妙法蓮華經。弘安五年十月七日

○椎地四郎殿御書書外二此經を一文一句なりとも聽聞して神に
 染ん人は。生死の大海を渡るべき船なるべし。妙樂大師云、一句染
 神カミ咸資彼岸、思惟修習永用舟航云云。生死の大海を渡らん事は妙
 法蓮華經の船にあらずんば叶ふべからず。抑も法華經の如渡得
 船の船と申事は。教主大覺世尊巧智無邊の番匠として四味八教
 の材木を取集め。正直捨權とけつりなして邪正一如と切合せ。醍
 醐一實の釘を丁とつて生死の大海へ押浮べ。中道一實の帆柱
 に界如三千の帆をあげて。諸法實相の追風おきかぜをぬて以信得入の一
 切衆生を取のせて。釋迦如來は楫を取り多寶如來は綱手を取給

大白牛車

へば。上行等の四菩薩は函蓋相應してきりきりこぎ給所の船を如渡得船の船とは申也。是に乗るべき者は日蓮が弟子檀那等也。能信じさせ給へ。弘長元年四月二十八日

○大白牛車書外一六五抑も此車と申は本迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ。三界の火宅を生死生死とぐるりぐるり廻り候處の車也。唯信心の轄くわに志の膏かたをささせ給ひて靈山淨土へ參り給ふへし。又心王は牛の如し。生死は兩の輪の如し。傳教大師云、生死二法、一心妙用有無、二道本覺眞徳云云。建治三年十二月十七日 南條七郎次郎殿

一念生死

○御義口傳下九勸發品御義口傳云、此品再演法華也。本迹二門、極理此品至極する也。○所詮此品、序品生死、二法也。序品我等衆生、生

始生終死

也。此品一切衆生死也。生死一念妙法蓮華經云也。於品品初題號、生方終方、死方也。此法華經、生死生死、轉たり生、故始置、如是我聞、如生、義也。死、故終、作禮而去、終たり去、死、義也。

第十一 報恩篇

四恩の略説

○十法界明因果鈔内三十九夫以持戒爲報、父母師僧國王主君一切衆生三寶恩也。父母養育之恩深。一切衆生互相助恩重。國王以正法治世、自他安穩也。依之修善恩重。主君亦蒙彼恩、養父母妻子眷屬所從、牛馬等設雖不爾、願一身等恩是重。師亦閉邪道趣正道等恩是深。佛恩不及言。文應元年四月二十一日

佛四恩
を説玉
ふ

四徳と
四恩と

三〇〇
○上野殿御消息縮外一三六九三世の諸佛の世に出させ給ひても皆皆四恩を報ぜよと説き。三皇五帝孔子老子顔回等の古の賢人は四徳を修せよと説き。四徳とは一には父母に孝あるべし。二には主に忠あるべし。三には友に合あて禮あるべし。四には劣れるに逢て慈悲あれと也。一に父母に孝あれとはたごひ親は物に覺おぼえずとも悪あざまなる事を云ふとも。聊かも腹も立てず誤る顔を見せず親の云ふ事に一分も違へず。親によき物を與へんと思ひてせめてする事なくば一日に二三度笑て向へと也。二に主に合あて忠あるべしとは聊も主うしに後痛心うしろめたさあるべからず。たごひ我身は失はるとも主には構へて善よきと思ふべし。隠れての信あれば顯れての徳ある也と云云。三には友に逢て禮あれとは友達の一日に十度二十度來れる人なりとも。千里二千里來れる人の如く思ふて禮儀いさくか疎に思ふべからず。四に劣れる者に慈悲あれとは我より劣りたらん人をば我子の如く思ひて一切憐み慈悲あるべし。此を四徳と云ふ也。是の如く振舞ふを賢人とも聖人とも云ふべし。此の四の事あれば餘の事にはよからねともよき者也。如是四の得を振舞ふ人は外典三千卷をよまねとも讀たる人となれり。

一 佛教の四恩者一には父母の恩を報ぜよ二には國主の恩を報ぜよ三には一切衆生の恩を報ぜよ四には三寶の恩を報ぜよ一に父母の恩を報ぜよとは父母の赤白二諦和合して我身とな

四恩の
廣説

る。母の胎内に宿る事二百七十日九月の間三十七度死るほどの苦みあり。生落時たへがたしと思ひ念する息頂より出る煙り梵天に至る。さて生落されて乳をのむ事一百八十餘石。三年か間は父母の膝に遊ひ人となりて佛教を信ずれば先づ此父と母との恩を報ずべし。父の恩の高き事須彌山猶ひきし母の恩の深き事大海還て淺し。相構て父母の恩を報ずべし。二に國主の恩を報ぜよ。よこは生れて已來衣食のたぐひより初て。皆是國主の恩を得てある者なれば現世安穩後生善處と祈り奉るべし。三に一切衆生の恩を報ぜよ。よこは。されば昔は一切の男は父なり女は母なり然る間生生世世に皆恩ある衆生なれば皆佛になれと思ふべき也。

持經の報恩の

四に三寶の恩を報ぜよ。よこは。○されば法華經を持つ人は父と母との報を報する也。我心には報すると思はねども此經の力にて報する也。○總じて此法華經を強く信じ參せて餘念なく一筋に信仰する者をは影の身にそうが如く守らせ給ひ候也。建治元年

必ず四恩を報せよ衆生の恩

○四恩鈔内四二佛法を習ふ身には必ず四恩を報ずべきに候か。四恩者心地觀經云、一には一切衆生の恩。一切衆生なくば衆生無邊誓願度の願を發し難し。又惡人無くして菩薩に留難をなさずは。いかでか功德をば增長せしめ候べき。二には父母の恩。六道に生を受るに必ず父母あり。其中に或は殺盜惡律儀謗法の家に生れぬれば。我ご其科を犯さざれども其業を成就す。然に今生の父母

父母の恩

國王の恩

は我を生て法華經を信ずる身となせり。梵天帝釋四大天王轉輪聖王の家に生て。三界四天を讓られて人天四衆に恭敬せられんよりも。恩重きは今の某が父母歟。三には國王の恩。天の三光に身をあたため地の五穀に神を養ふこと皆是國王の恩也。其上今度法華經を信じ今度生死を離るべき國主に値奉れり。争か少分の怨に依てたろかに思ひ奉るべきや。四には三寶の恩。○四大海水を硯の水とし。一切の草木を焼て墨となして。一切のけだもの毛を筆とし。十法世界の大地を紙と定て注し置とも。争か佛の恩を報じ奉べき。法の恩を申さば法は諸佛の師也。諸佛の貴き事は法に依る。されば佛恩を報せんと思はん人は法の恩を報ずべ

三寶の恩

佛の恩

法の恩

僧の恩

し。次に僧の恩をいはば佛寶法寶は必ず僧によて住す。譬ば薪なければ火無く大地無れば草木生ずべからず。佛法有りこいへども僧有りて習ひ傳へずんば正法像法二千年過て末法へも傳はるべからず。故に大集經云。五箇の五百歳の後に無智無戒なる沙門を失ありと云て。是を惱すは此人佛法の大燈明を滅せんと思へと説れたり。然ば僧の恩を報し難し。されば三寶の恩を報し給へし。弘長二年正月十六日

老狐白龜

豫讓智伯

○報恩鈔内四五六夫老狐は塚を後にせず白龜は毛寶が恩を報ず。畜生すら如此況人倫をや。されば古の賢者豫讓と云し者は劍を呑みて智伯が恩にあて弘演と申せし臣下は腹を割て衛の懿公

眞實の報恩の

が肝を入たり。何況佛法を習ん者父母師匠國恩を忘るへしや。此大恩を報ぜんには必ず佛法を習ひ極め智者となりて叶ふべきか。譬へば衆盲を導んには生盲の身にては橋河を渡し難し。方風を辨わかざらん大舟は諸商を導て寶山に至るべしや。佛法を習ひ極めんと思はばいごまあらずは叶ふべからず。いごまあらんと思はば父母師匠國主等に隨ては叶ふべからず。是非につけて出離の道を辨へざらんほごは父母師匠等の心に隨ふべからず。此義は諸人をもはく顯にもはづれ冥にも叶ふまじと思ふ。然れども外典の孝經にも父母主君に隨はずして忠臣孝人なる様見へたり。内典の佛經云、棄恩入無爲眞實報恩者等云云。比干が王に隨は

法の邪を簡べ

ずして賢人の名をこり。悉達太子の諍飯大王に背きて三界第一の孝となりしこれなり。建治二年七月二十一日

○聖愚問答鈔外卷七愚人云、今聖人の教誡を聽聞するに日來の矇昧忽に開けぬ天真發明とも云つべし。理非顯然なれば誰か信仰せざらんや。但し世上を見るに上一人より下萬民に至るまで念佛眞言禪律を深く信受し御座す。さる前には國土に生を受ながら争か王命を背かんや。其上我が親と云ひ祖と云ひ旁念佛等の法理を信じて他界の雲に交り畢ぬ。又日本には上下の人数幾か有る雖然、權教權宗の者は多く此法門を信ずる人は未聞其名。仍て善處惡處をいはず邪法正法を簡はず。内典五千七千の多きも

釋尊は
孝養は
孔子は
忠孝は

一内
轍外

四恩は
人倫は

外典三千餘卷の廣きも只主君の命に隨ひ父母の義に叶ふが肝
心也。されば教主釋尊は天然にして孝養報恩の理を説き孔子は
大唐にして忠功孝高の道を示す。師の恩を報ずる人は肉をさき
身をなく主の恩をしる人は弘演は腹をさき豫讓は劍をのむ。親
の恩を思ひし人は丁蘭は木を刻み伯瑜は杖になく。儒外内道は
異なり。雖も報恩謝徳の教は替る事なし。然は主師親のいま
だ信ぜざる法理を我始て信ぜん事既に違背の過に沈みなん。○
進退惟谷れり我如何せんや。聖人云、汝此理を知らず猶是語を
なす理の不通。歎意の不及。歎。我釋尊の遺法を學び佛法に肩を入
れてより已來知恩を以て最こし報恩を以て前こす。世に四恩あ

孝道と
諫言と

り知之。人倫となづけ不知。畜生こす。予父母の後世を助け國家の
恩徳を報せんと思が故に身命を捨る事敢て佗事にあらず唯知
恩を旨とする計り也。先つ汝目を塞き心を靜めて道理を思へ。我
は善道を知ながら親と主との惡道にかからんを諫めざらんや。
又愚人の狂ひ酔て毒を服せんを我知らず是をいましめざら
んや。其の如く法門の道理を存じて火血刀の苦を知らず是が
恩を蒙る人の惡道に墮ん事を歎かざらんや。身をなげ命をも捨
つべし諫めてもあきたらず歎きても限りなし。今生に眼を合す
る苦み猶是を悲む況や悠悠たる冥途の悲み豈不痛哉。恐れても
恐るべきは後世慎ても慎むべきは來世也。而るを是非を論ぜず

親の命に随ひ邪正を簡はず主の仰せに順はんこと云ふ事。愚痴の
前に忠孝に似たれども賢人の意には不忠不孝是に過へからず。
○彼の淨藏淨眼は父の妙莊嚴王外道の法に著して佛法に背き
給しかども。二人の太子は父の命に背て雲雷音王佛の御弟子と
なり。終に父を導て沙羅樹王佛と申す佛になし申されけるは不
孝の人と云ふべき歟。經文には棄恩入無爲眞實報恩者と説て。今
生の恩愛をば皆捨て佛法の實の道に入る是實に恩を知れる人
也。と見ゆたり。文永二年
○報恩鈔内二四九七禪僧數百人念佛者數千人眞言師百千人。或は奉
行につき或は權家権家につき。或はきり女房權閨につき或は後家尼

御前等について無盡の讒言をなせし程に。最後には天下第一の
大事日本國を失んと呪咀する法師なり。故最明寺殿極樂寺殿を
無間地獄に墮たりと申す法師なり。御尋あるまでもなし但須臾
に頸をめせ。弟子等をば又或は頸を切り或は遠國につかはし或
は籠に入れよと。尼御前達怒らせ給ひしかば其儘行れけり。去文
永八年九月十二日の夜は相摸國龍口にて切るべかりしが如何
にしてや有けん其夜は延ひて依智と云ふ處へ着ぬ。又十三日の
夜は許たりと多口どくちしか。又如何にや有けん佐渡國までゆく。今日
切る明日切ること云し程に四箇年と云ふに。結句は去文永十一年
太歲甲戌二月の十四日に許て同三月二十六日に鎌倉へ入り。同

聖祖の
報恩の

四月の八日平左衛門尉に見参してやうやうの事申たりし中に。今年は蒙古は一定寄すべしと申ぬ。同五月十二日に鎌倉をいで此山に入れり。是偏へに父母の恩師匠の恩三寶の恩國恩を報ぜんが爲に身を破り命を捨れども破れざればさてこそ候へ。又賢人の習ひ三度國を諫むるに用ひずんば山林に交れどは定る例なり。此功德は定めて上三寶下梵天帝釋日月までも知し召しぬらん。父母も故道善房の聖靈も扶り給ふらん。延治二年七月二十一日

大恩は
題目

○御義口傳上三御義口傳云。世尊者釋尊大恩者南無妙法蓮華經也。釋尊大恩報恩法華經可受持者也是即釋尊御恩奉報也。大恩題目云事次下以希有事說希有事者題目也。此大恩妙法蓮華經四十

法華の
力用

餘年間秘給後八箇年大恩開給也。文句一云。法王啓運矣。運者大恩妙法蓮華經也。云云。今日蓮等之類奉唱南無妙法蓮華經。日本國一切衆生助思豈非世尊大恩乎

第十二 祈 禱 篇

行者の
不實

○祈禱鈔内九十六大地は指ば外外る外とも虚空をつなく者はありとも。潮の満干ぬ事はありとも日は西より出る出る出とも。法華經の行者の祈の叶ぬ事はあるべからず。法華經の行者を諸の菩薩人天八部等二聖二天十羅刹女等千に一も來て守給はぬ事侍らば上は釋迦諸佛をあなづり奉り下は九界をたぼらかす失あり。行者は必

臭袋と金

持戒は市の虎
智者は鱗角

不實なりとも智慧は愚也とも身は不淨なりとも戒徳は備へずとも南無妙法蓮華經と申さば必守護し給へし。袋きたなごて金を捨る事なかれ伊蘭を悪ばく旃檀あるべからず。谷の池を不淨なりと嫌はば蓮を取さるべし。行者を嫌給はば誓を破り給ひなん。正像既に過ぬれば持戒は市の中の虎の如し智者は鱗角よりも希ならん。月を待までは燈を憑へし寶珠のなき處には金銀も寶なり。白鳥の恩をば黒鳥に報ずべし聖僧の恩をば凡僧に恩ずべし。ごくごく利生を授け給へし強盛に申ならはいかで祈の叶はさるべき。文永九年

二色心
二病

○富木入道殿御返事内二二御消息云凡、疫病彌興盛等云云。夫人に

輕重の二病
不定の二業

阿闍世王

二、病あり一には身の病所謂地大百一水大百一火大百一風大百一已上四百四病也。此病は設佛に有されども治之。所謂治水流水耆婆扁鵲等が方藥此れを治るに愈ずと云事なし。二には心の病所謂三毒乃至八万四千の病也。此病は二天三仙六師等も治難し何況神農黃帝等の方藥及べしや。弘安五年九月

○可延定業書外二三四夫病に二あり一者輕病二者重病。重病すら善醫に値て急に對治すれば命猶存す何況輕病をや。業に二あり一定業二不定業。定業すら能能懺悔すれば必消滅す何況不定業をや。法華經第七云此經則爲闍浮提人病之良藥等云云。○阿闍世王は御年五十、二月十五日大惡瘡身に出來せり。大醫耆婆が力も

陳臣
不輕
悲母の
延壽の
命は第
一の寶

及はず三月七日必死して無間大城に墮つべかりき。五十餘年が
間、大樂一時に滅して一生の大苦三七日に集れり。定業限ありし
かごも佛法華經を重て演説して涅槃經と名て大王に與給しか
ば。身の病忽に平愈し心の重罪も一時に露と消にき。佛滅後一千
五百餘年陳臣と申人ありき。命知命にありと申て五十年に定て
候しが。天台大師に値て十五年の命を宣て六十五まで居しき。其
上不輕菩薩は更増壽命と説て法華經を行して定業を延給き。○
されば日蓮悲母を祈て候しかば現身に病を治のみならず四箇
年の壽命を延たり。○心みに法華經の信心を立て御覽あるべし。
○命と申物は一身第一の珍寶也。一日なりともこれを延るなら

聖祖の
祈禱

は千万兩の金にも過たり。法華經の一代の聖教に超過して尊と
申は壽量品の故ぞかし。閻浮第一の太子なれとも短命なれば草
よりもかろし。日輪の如くなる智者なれとも天死あれば生る犬
に劣る。○一日の命は三千界の財にも過て候。○伊豫殿もあなか
ちになげき候へは日月天に自我偈をあて候はんずるなり。
○祈禱經送狀卷五十八一蒙仰候末法、行者息災延命、祈禱事、別紙一卷
註進候毎日一返無闕、如可被讀誦候。日蓮も信じ始候し日より毎
日此等の勘文を誦し候て佛天に祈誓し候によりて。雖遇種種大
難、法華經の功力釋尊の金言深重なる故に今まで無相違候也。付
其法華經の行者は信心に無退轉身に無詐親、一切法華經に任其

弘安二年
宮木尼御
前御返事

祈禱の
種類

身如金言修行せば。慥に後生は不及申。今生も息災延命にして勝妙の大果報を得。廣宣流布之大願をも可成就也。文永十年正月二十八日

○道妙禪門御書外一五三御親父祈禱之事承候間佛前にて祈念申べく候。於祈禱者雖有顯祈顯應。冥祈冥應。冥祈顯應。祈禱。

只肝要者此經信心を致し給候はば現當所願可有満足候。建治二年八月十日

厄年の
祈禱
厄の説
明

○太田左衛門御返事外一七三御邊は今年は大厄と云云。昔伏羲の御宇に黄河と申河より龜と申魚八卦と申す文を甲に負て浮出たり。時の人此文を取舉て見れば人の生年より老年の終まで厄の様を明たり。厄年の人の危き事は少水に住む魚を鷗鵠なんごが伺ひ燈の邊に住める夏の蟲の火中に入んごするが如く危し。

御守の
授與

鬼神稍もすれば此人の神を伺ひ惱さんごす。○然に法華經と申御經は身心の諸病の良藥也。されば經云此經則爲閻浮提人病之良藥。若人有病得聞是經。病則消滅。不老不死等云云。又云現世安穩後生善處等云云。又云諸餘怨敵皆悉摧滅等云云。取分奉る御守方便品壽量品同くは一部書て進らせ度候へごも。當時は難去隙ごも入る事候へば略して二品奉り候。相構相構不離御身重ね包て御所持可有者也。弘安元年四月二十三日

御守堅
く持て

○經王殿御返事内二五二夫に付て經王御前の事二六時中に日月天に祈り申候。先日守暫時も身をは離さず持給へ。文永十年八月十五日

懷胎の
御符

○四條金吾女房御書外六七懷胎の由承候畢。それについては符の

闇夜の
燈火の
濁水
明月
感應の
譬

事仰候。日蓮相承の中より撰み出して候能々信心あるべく候。譬へば祕薬なりとも毒入ぬれば薬の用少なし。劍なれども臆病人の爲には何かせん。就中夫婦共に法華の持者也。法華經流布あるべき種をつぐ所の玉の子出て生れん目出度覺候ぞ。色心二法をつぐ人も争かをそなはり候べき。ごくごくこそ生れ候はむすれ。此薬をのませ給はゞ疑ひなかるべきなり。闇なれども燈入ぬれば明かなり濁水にも月入ぬればすみり。明かなる事日月にすぎんや淨き事蓮華にまさるべきや。法華經は日月と蓮華となり故に妙法蓮華經と名く。日蓮又日月と蓮華との如くなり。信心の水すまば利生の月必ず應を垂れ守護し給へし。ごくごく生れ候

御符の
功驗

へし。○日蓮生るべき種を授けて候へば争か我子にをこるべき。有一寶珠價值三千等。無上寶聚不求自得。釋迦如來皆是吾子等云云。日蓮あに此義にかはるべきや。文永八年五月七日
○月滿御前御書受七五若童生れさせ給ひし由承り候目出度覺へ候。殊に今日は八日にて候。彼と云ひ此と云ひ所願潮の指が如く春の野に華の開けるが如し。然れば急き急き名をつけ奉る月滿御前と申すべし。其上此國の主八幡大菩薩は卯月八日に生れさせ給ふ。娑婆世界の教主釋尊も又卯月八日に御誕生なりき。今の童女又月は替れども八日に生れ給ふ釋尊八幡の生れ替りこや申さん日蓮は凡夫なれば能くは知ず。是併日蓮が符を進らせし

天に赦
るを祈

故也。さこそ父母も悦び給ふらん。殊に御祝として餅酒鳥目一貫
文送給候畢ぬ是又御本尊十羅刹に申上て候。文永六年五月

最蓮と
契約

○最蓮房御返事外十二餘りにうれしく候へば契約一申し候はん。
貴邊の御勘氣疾許させ給て都へ御上り候はば日蓮も鎌倉殿
はゆるさじこの給ひ候とも諸天等に申て鎌倉に歸り京都へ音
信可申候。又日蓮先立て許候て鎌倉へ歸候はば貴邊をも天に申
て古京へ可奉歸候。文永九年四月十三日

過時の
祈禱

○法華初心成佛鈔内二十二又藥王菩薩藥上菩薩觀音勢至等の菩
薩は正像二千年の御使也。此等の菩薩達の御番は早過たれば上
古の様に利生有まじき也。されば當世の祈を御覽ぜよ一切叶は

應時の
祈禱

ざる者也。末法今の世の番衆は上行無邊行等にてをはします也。
此等を能能明め信じてこそ法の驗も佛菩薩の利生も有るべし
こは見ゆたれ。譬ばよき火打こよき石の角こよきほくちこ此三

火打と
石の管

寄合て火を用る也。祈も又如是よき師こよき檀那こよき法こ此
三寄合て祈を成就し國土の大難をも拂ふべき者也。建治三年 岡宮妙法尼

焚燒
御符

○伯耆公御房外二九四六御布施御馬一疋皇令入御見參候了。兼又此
經文は二十八字法華經の七卷藥王品の文にて候。然に聖人の御
乳母の一年御所勞大事にならせ給い候て。やがて死なせ給いて

蘇生の
功驗

候し時此經文を遊し候て。淨水を持って進せさせ給しかば。時をか
へずいさかへらせ給いて候經文也。南條七郎次郎時光は身はあ

感應の例證

傳教の八幡空也と松尾

いさき者なれども。日蓮に御志深き者也。たごひ定業なりとも今度ばかり閻魔王たすけさせ給へご御誓願候。明日寅卯辰の刻に精し。河の水取寄せ給い候て。此經文を灰にやきて水一合に入まいらせさせ給ふべく候。恐恐謹言 弘安五年二月二十日

○持妙法華問答鈔卷二十一釋迦一佛の悦ひ給のみならず。諸佛出世の本懐なれば十方三世の諸佛も悦び給へし。我即歡喜諸佛亦然と説れたれば。佛悦ひ給のみならず神も即隨喜し給なるべし。傳教大師是を講し給しかば八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し。空也上人是を讀給しかば松尾明神は寒風をふせがせ給ふ。されば七難即滅七福即生と祈んにも此御經第一也。現世安穩と見られたれ

法華經の佛天の栖食

ば也。佗國侵逼難自界叛逆難の御祈禱にも此妙典に過たるはなし。令百由旬内無諸衰患と説れたれば也。弘長三年

○上野殿母御前御返事外九七八抑も何なれば三世十方の諸佛は強に此法華經をば守らせ給ふと勤へて候へば。道理にて候けるぞ法華經と申は三世十方の諸佛の父母也。乳母也。主にてましましけるぞや。蛙と申す蟲は母の音を食とす母の聲を聞かざれば生長する事なし。迦羅求羅と申す蟲は風を食とす風吹かざれば生長せず。魚は水をたのみ鳥は木を栖とす佛も亦かくの如く法華經を命とし食とし栖かとし給ふ也。魚は水にすむ佛は此經にすみ給ふ鳥は木にすむ佛は此經にすみ給ふ月は水に宿る佛は此

經に宿り給ふ。此經なき國には佛まします事なし。御心得ある
べく候。弘安三年十月二十四日

第十三 追福篇

追福の
歡喜

子孫財
を争ひ
亡者苦
を増す

○十王讚歎鈔續外廿九信心疎かにして三途に墮して重苦を受ん時
悔ることも益なかるべし。譬は網にかくる鳥の高く飛ざる事を悔
るが如くなるべし。さても罪人妻子の追善今や今やと待つ處に。
追善をこそ爲たざらめ。還て其子供跡跡の財寶を論じて種々の罪業
致せば罪人彌苦を受く。哀れ娑婆にありし時は妻子の爲にこそ
罪業を造て。今かくる憂きめを見るに少しの苦を輕ふする程の

善根をも送らざるこそ恨み限りなし。貯へ置し財寶一だにも今
の用には立たざりけり。一方ならぬ悲さに泣叫ぶこそ哀れな
れ。大王是を御覽じて汝が子供不孝の者也。今は力及ばず。て地
獄に墮さる。又追善をなし逆謗救助の妙法を唱へ懸れば成佛す
る也。然れば大王も歡喜し給ひ罪人も喜ふ事無限。建長六年

○同鈔續七唐に叔雄七云者は身を投て孝養を致しき。それまで
こそ無くとも信心の歩を運び何そ彼の菩提を祈らざらんや。孟
宗が雪の中の笋たかんな王祥が氷の上の魚是は孝の志を感する所也。況
や孝養を致す家には梵天帝釋四大天王住し給ふと云へり。是は
正しく如來の金言也。誰か是を疑んや。然れば如是輩は皆諸天の

回向の
三種
叔雄
孟宗
王祥

擁護を蒙る者也。但し孝養に三種あり。衣食を施すを下品とし、父母の意に違はざるを中品とし、功德を回向するを上品とす。存生の父母にだに尙功德を回向するを上品とす。況や亡親にをいてをや。雪中の笋何かせん法喜禪悦食の味にはしかじ。叔雄身を投ても更に出離生死の便りにはならず。只善根を修して父母の得脱を祈るべし。建長六年

○刑部左衛門尉女房御返事外九八九四佛の云く父母は常に子を念へども子は父母を念はず等云云。影現王の云く父は子を念ふと雖も子は父を念はず等是也。設ひ又今生には父母に孝養を致様なれども後生のゆくゑまで問ふ人はなし。母の生て御坐せしに

は心には思はねども一月に一度一年に一度は問ひしかども。死し給ひてより後は初七日より二七日乃至第三年までは人目の事なれば形の如く訪ひ候へども。十三年四千餘日が間の程はかきたる問ふ人はなし。○夫、四十餘年の大小顯蜜の一切經並に眞言華嚴三論法相俱舍成實律淨土禪宗等の佛菩薩二乘梵釋日月及、元祖等は。法華經に隨ふ事なくば何なる孝養をなすとも我則墮慳貪の科免るべからず。故に佛本願に趣ひて法華經を説き給き。而るに法華經の御座には父母在まさざりしかば。親の生れて在ます方便土と申國へ贈り給ひて候也。其御言に云く而於彼土求佛智慧得聞是經等云云。此經文は智者ならん人人は心を留む

聖祖の追福

へし教。主釋尊の父母の御爲に説せ給ひて候。經文也。此法門は唯天台大師と申せし人計りこそ知て御坐候けれ。其外の諸宗の人知らざる事也。日蓮が心中に第一と思ふ法門也。父母に御孝養の意あらん人人は法華經を贈り給ふべし。教主釋尊の父母御孝養には法華經を贈り給て候。日蓮が母存生して御座せしに仰せ候し事をも餘りに背き參らせて候しかば。今後參らせて候か強ちに悔しく覺へて候ば。一代經を檢へて母の孝養を仕らん。存候間。母の御訪ひ申させ給ふ人人をば我身の様に思ひ參せ候へば。餘りに嬉しく思ひ參せ候間。荒々書付て申候也。定めて過去聖靈も忽に六道の垢穢を離れて靈山淨土へ御參り候らん。弘安三年十月二十一日

聖祖の追福

○光日房御書縮内四二四 去文永八年太歲辛未九月の頃より御勸氣を蒙りて北國の海中佐渡の島に放たれたりしかば。何さなく相州鎌倉に住すまには生國なれば安房國は戀かりしかども。我國ながらも人の心も何にこや昵悪昵悪ありしかば。常にはかよう事も無し。て過しに。御勸氣の身と成りて死罪となるべかりしが。暫く國の外に放たれし上は小縁おほろけならでは鎌倉へは返るべからず。返らずば又父母の墓を見る身と成り難しと思ひつゞけしかば。今更飛立計り悔敷てなごかかくる身とならざりし時。日にも月にも海も渡り山をも超へて父母の墓を見。師匠の有様をも訪ひ音信ざりけん。と歎敷候。建治二年三月

父母の墓を戀

法蓮の
追福

○法蓮鈔内二五今法蓮上人の送り給へる諷誦の狀に云く相當、慈父幽靈第十三年、忌辰奉轉讀、一乘妙法蓮華經五部等云云。○法蓮上人の御身は過去聖靈の御容貌を殘し置れたる也。譬ば種の苗となり華の菓となるか如し。其華は落て菓はあり種はかくれて苗は現に見ゆ。法蓮上人の御功德は過去聖靈の御財也。松榮れば柏悦ぶ芝枯れば蘭泣く。情なき草木すら如此。何況情あらんをや。又父子の契をや。彼諷誦云、從慈父閉眼之朝、至于第十三年之忌辰、於釋迦如來之御前、自奉讀誦自我偈一卷、回向聖靈等云云。○今の施主十三年の間、毎朝讀誦せらるる自我偈の功德は唯佛與佛、乃能究盡なるべし。夫法華經は一代聖教の骨髓なり。自我偈は二

父母の
愛情

十八品の魂なり。三世の諸佛は壽量品を命ごし十方の菩薩も自我偈を眼目ごす。建治元年亥年

盆會
追福

○四條金吾殿御書外七十二雪の如く白く候。白米一斗古酒の如く候。油一筒御布施一貫文。態使者を以て盆料送り給ひ候。殊に御文の趣難有哀れに覺候。抑も孟蘭盆ご申は源目連尊者の母青提女ご申人。慳貪の業によりて五百生餓鬼道に墮給て候。を目連救ひしより事起りて候。雖然佛には成さず其故は我身。いまた法華經の行者ならざる故に母も佛に成す事なし。靈山八箇年の坐席にし。て法華經を持ち南無妙法蓮華經ご唱へて多摩羅跋梅檀香佛ごなり給ひ。此時母も佛に成給ふ。又施餓鬼の事仰せ候。法華經第三

施食
供養

當世の僧侶の
當時の在家

云、如從飢國來忽遇大王膳云云。此文は中根の四大聲聞醍醐の珍膳を音にも聞ざりしが。今經に來て始て醍醐の味を飽迄に嘗て昔し飢たる心を忽にやめし事を説給ふ文也。若爾者餓鬼供養の時は此文を誦して南無妙法蓮華經と唱て吊ひ給べく候。○當世の僧を見るに人に隠して我一人計り供養を受る人もあり。○又在家の人人も我父母地獄餓鬼畜生に墮て苦患を受るをは吊ずして。我は衣服飲食に飽滿牛馬眷屬充滿して我心に任せて樂む人をば何に父母の羨しく恨み給らん。○今月十二日、妙法聖靈は法華經の行者也。日蓮が檀那也。爭か餓鬼道に墮給ふべきや。定て釋迦多寶十方の諸佛の御寶前に在まさん。是こそ四條金吾殿の

追福
孝養

母よ母よご同心に頭を撫て悦ひ褒め給らめ。哀れ尊き子を我はもちたりと釋迦佛と語らせ給らん。文永八年七月十二日

○四條金吾釋迦佛供養事内二四七八御日記の尊き申計りなけれど紙上に難盡。何よりも日蓮が心に尊き事候。父母御孝養の事度の御文に候上に。今日の御文涙更にこぼまらず。我が父母地獄にやははすらんご歎げかせ給ふ事の哀さよ。建治二年七月十五日

○孝養篇阿佛鈔見合

自他
回向

○種種御振舞御書内二二九三されば日蓮貧道の身と生て父母の孝養心にたらず國の恩を報ずべき力なし。今度頭を法華經に奉て其功德を父母に回向せん。其餘りは弟子檀那等に配當へし。建治二年光日尼殿

千日の
追孝

○千日尼御前御返事内一七六御消息に云、尼が父の十三年は來る八月十一日又云、錢一貫文等云云。餘り御志の切に候へば、ありて御坐まますに隨ひて法華經十卷送り參せ候。日蓮が戀しくをはさん時は學乘房に讀ませて御聽聞あるべし。此經を印おして後生には御尋あるべし。弘安元年七月二十八日

惡靈祟
を爲す

○回向功德鈔二三三又訪ふ事なくは何の世にか浮ぶべきや。我れ父母の物を讓られなから死人なれば何事の有るべきと思て後生を訪されば、惡靈あくまご成り子子孫々に祟をなすご涅槃經ご申經に見へたり。他人の訪ぬよりも親類財を與へられて彼の苦を訪ざらん志の程浮薄うきかるべし。悲むべし哀むべし南無妙法蓮華經。

康元年七月二十二日

塔婆の
功德

○中興入道消息内一九三去ぬる幼子の娘御前の十三年に丈六の卒塔婆を立て其面おもてに南無妙法蓮華經の七字を顯あらわして坐まさせば。北風吹ふば南海の魚族いさな其風に當りて大海の苦を離れ。東風來れば西山の鳥鹿其風を身にふれて畜生道を免かれて都率の内院に生なれん。況や彼の卒塔婆に隨喜をなし手を觸れ眼に見參らせ候人類をや。過去の父母も彼の卒塔婆の功德に依りて天の日月の如く淨土を照らし。孝養の人並に妻子は現世には壽いもちを百二十年持て後生には父母ご共に靈山淨土に參り給はん事。水澄めは月うつり鼓を打てば響のあるが如しご思食ご候へ等云云。弘安二年十一月三十日

第十四 國家篇

由安國
來

○安國論御勸由來外三正嘉元年丁巳八月二十三日戌亥時超於前代大地震同二年戊午八月一日大風同三年己未大飢饉正元元年未大疫病同二年庚申四季大疫不已萬民既超大半招死了而間國主驚之仰付內外典有種種御祈禱雖爾無一分驗還增長飢疫等日蓮見世間體粗勸一代經御祈請無驗還增長凶惡之由道理文證得之了終無止造作勸文一通其名號立正安國論文應元年庚申七月十六日辰付屋戶野入道進申古最明寺入道殿了此偏為報國土恩也○而捧勸文已後經九箇年今年後正月見大蒙古國國書相叶日蓮勸文宛如符契○雖似自讚若毀壞此國土復佛法破滅無疑者也文永五年四月五日法皇御房

第三諫
立正安國

○立正安國論內三旅客來嘆曰自近年至近日天變地天飢饉疫病遍滿天下廣逆地上牛馬斃巷骸骨充路招死之輩既超大半不悲之族敢無一人然間或專利劍即是之文唱西土教主之名或恃衆病悉除之願誦東方如來之經或仰病即消滅不老不死之詞崇法華真實之妙文或信七難即滅七福即生之句調百座百講之儀有因秘密真言之教灑五瓶之水有全坐禪入定之儀澄空觀之月若書七鬼神之號而押千門若圖五大力之形而懸萬戶若拜天神地祇而企四角四界之祭祀若哀萬民百姓而行國主國宰之德政雖然唯摧肝膽彌逼飢疫乞客溢目死人滿眼臥屍為觀竝尸作橋觀夫二離合璧五緯連珠三寶在世百王未窮此世早衰其法何廢是依何禍是由何誤矣主

人曰獨愁此事憤悻胸臆客來共嘆屢致談話夫出家而入道者依法而期佛也而今神術不協佛威無驗具觀當世之體愚發後生之疑然則仰圓覆而吞恨俯方載而深慮情傾微管聊披經文世皆背正人悉歸惡故善神捨國而相去聖人辭所而不還是以魔來鬼來災起難起不可不言不可不恐文應元年七月

國は法に依昌

二難猶殘

一難未起

○同經三八四所詮天下泰平國土安穩君臣所樂士民所思也夫國依法而昌法因人而貴國亡人滅佛誰可崇法誰可信哉先祈國家須立佛法○藥師經七難內五難忽起二難猶殘所以他國侵逼難自界叛逆難也大集經三災內二災早顯一災未起所以兵革災也金光明經內種々災禍一一雖起他方怨賊侵掠國內此災未露此難未來仁王經

四表の靜謐に速に善に歸せよ

七難內六難今盛一難未現所以四方賊來侵國難也加之國土亂時先鬼神亂鬼神亂故萬民亂今就此文具案事情百鬼早亂萬民多亡先難是明後災何疑若所殘之難依惡法之科並起競來者其時何爲哉帝王者基國家而治天下人臣者領田園而保世上而他方賊來而侵逼其國自界叛逆而掠領其地豈不驚哉豈不駭哉失國滅家何所遁世汝須思一身之安堵者先禱四表之靜謐者歟○汝早改信仰之寸心速歸寶乘之一善然則三界皆佛國也佛國其衰哉十方悉寶土也寶土何壞哉國無衰微土無破壞身是安全心是禪定此詞此言可信可崇矣○速回對治早致泰平先安生前更扶沒後唯非我信又誠他誤耳

第一の言證の中
書與の時宗

諫臣在
國爭子

第一の言證の中
書與の良觀

○與北條時宗書内二十九謹令言上候。抑正月十八日西戎大蒙古國牒狀到來、日蓮先年集諸經要文、勘之如立正安國論、少不違普合。當日蓮聖人、一分知未萌、故也。然間重而奉驚、此由急止、建長寺壽福寺極樂寺多寶寺淨光明寺大佛殿等、御歸依、不然重而又自、四方可責來也。速調伏蒙古國、人而令安泰、我國給被彼調伏事、非日蓮不可叶也。諫臣在國、則其國正、爭子在家、則其家直。國家安危、在政道、直否佛法、邪正、依經、文明鏡云云。文永五年十月十一日

○與極樂寺良觀書外三就西戎大蒙古國簡牒事、鎌倉殿其外、令進書狀候。日蓮去文應元年之比、勘申如立正安國論、毫末計不相違之候。此事如何。長老忍性速翻、嘲哂之心、早令歸日蓮房、給若不然者、輕

今生は
國賊
未來は
墮獄

蒙古退
治の大
將

白樂の
樂府

賤人間者、與白衣說法之失難脫。歟。依法不依人、如來金言也。良觀聖人住處、說法華經云、或有阿練若納衣在空閑、阿練若翻無事、爭日蓮、譏奏之條、住處相違、併似三學、矯賊聖人也。借聖增上慢、而今生國賊來世、墮在那落、必定矣。聊悔先非、可歸日蓮。此趣奉始、鎌倉殿、建長寺等、其外、令披露候。所詮欲遂本意、不如對決。即以三藏淺近之法、向諸經中王之法華、如江河與大海、華山與妙高、勝劣、蒙古國調伏秘法定、可有御存知候歟。日蓮日本第一、法華經行者、爲蒙古國退治、大將於一切衆生中、亦爲第一者是也。文言多端、不能盡理、併令省略候。文永五年十月二十三日

○種種御振舞御書内二十三去文永五年後、正月十八日、西戎大蒙古國より日本國を襲ふべき由牒狀を渡す。日蓮が去文應元年大歲に庚申に

佛の未來記

大師號

三諫第二の愛祖

勘へたりし立正安國論少も違わず符合しぬ。此書は白樂天が樂府にも越へ佛の未來記にも劣らず。末代の不思議なに事かこれにすぎん。賢王聖主の御世ならば日本第一之權狀にも行われ現身に大師號もあるべし。定んて御尋ありて軍事の僉儀をも言ひ合せ。調伏なんごも申し付られぬらんご思ひしに其義なかりしかば。其年の末十月に十一通の狀を書きて方方へ驚かし申す。國に賢人なんごも有るならば不思議なる事かな。 建治二年 興光日房書

○一昨日御書卷六十六一昨日罷入見參候之條悅入候。抑人之在世誰不思後世。佛之出世專爲救衆生也。爰日蓮自成比丘。旁開法門。已覺諸佛之本意。早得出離之大要。其要者妙法蓮華經是也。一乘之崇重

太公股に入りに張良を最る

三國之繁昌儀流眼前。誰貽疑網哉。而專背正路。偏行邪途。然間聖人捨國善神成曠。七難並起。四海不閑。方今世悉歸關東。人皆貴土風。就中日蓮得生於此土。豈不思吾國哉。仍造立正安國論。故最明寺入道殿之御時。以宿屋入道入見參畢。而近年之間。多日之程。犬戎亂。浪夷敵伺國。先年所勘申近日令符合者也。彼太公之入殷國也。依西伯之禮。張良之量秦朝也。感漢王之誠。是皆當于時。得於賞。回謀於帷帳之中。決勝於千里之外者也。夫知未萌者。六正聖臣也。弘法華者。諸佛之使者也。而日蓮忝開鷲嶺鶴林之文。覺鵝王鳥瑟之志。剩勘將來粗得。普合雖不及先哲。定可希後人者也。知法思國志。尤可被賞之處。邪法邪教之輩。譏奏讒言之間。久懷大忠。而未達微望。剩罷入不快之見參。

忠孝の本義

聖祖は棟梁の

二難の豫言

偏愁難治之次第者也。伏惟不昇泰山者不知天、高不入深谷者不知地、厚仍爲御存知、立正安國論一卷進覽之、所勸載之文九牛之一毛也、未盡微志耳、抑貴邊者當時天下棟梁也、何損國中之良材哉、早回賢慮、須退異敵、安世安國爲忠、爲孝矣、是偏爲身、不述之爲君、爲佛、爲神、爲一切衆生、所令言上也。文永八年九月十二日

○法蓮鈔内二六九五去文永八年九月十二日の御勸氣の時重て申して云、予は日本國の棟梁なり。我を失ふは國を失ふなるべし。今是用ひまじけれども後の爲にこて出しにき。建治元年 興符谷法蓮日記

○種種御振舞御書内二二八三佛滅後二千二百二十餘年の間迦葉阿難等馬鳴龍樹等南岳天台等妙樂傳教等だにもいまだ弘め給は

ぬ。法華經の肝心諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字。末法の始に一閻浮提に弘らせ給ふべき瑞相に日蓮魁さきがけしたり。和黨共ちやうど二陳三陳つづきて迦葉阿難にも勝れ天台傳教にも超へよかし。僅の小島の主等が威嚇おそさんを恐ては閻魔王の責をば如何すべき。佛の御使つかひ名乗ながら臆せんは無下の人人なり。こ申し含ぬ。さりし程に念佛者持齋眞言師等自身の智は及ばず。訴狀も叶はざれば。上郎尼御前達に取付て種種に構へ申。故最明寺の入道殿極樂寺の入道殿を無間地獄に墮たり。こ申し。建長寺壽福寺極樂寺長樂寺大佛寺等を焼はらへ。こ申し。道隆上人良觀上人等を頸をはねよ。こ申す。御評定に何こなく。こも日蓮が罪禍免れ難し。但し上件の

十日問
注召出

事一定申すか。召し出て尋ねらるべし。召出されぬ。奉行人の云く上^{かみ}の仰せかくの如し。申せしかば上^{かみ}の事一言も違わず申す。但し最明寺殿極樂寺殿を地獄と云ふ事は空事なり。此法門は最明寺殿極樂寺殿御存生の時より申せし事なり。詮ずる處上^{かみ}の事ごもは此國を思ひて申事なれば。世を安穩にたもたんとをばさば彼法師ばらを召合て聞し召せ。さなくして彼等にかわりて理不盡に失^{あやま}に行る。程ならば國に後悔ありて。日蓮御勘氣を蒙らば佛の御使を用ひぬに成るべし。梵天帝釋日月四天の御咎ありて。遠流死罪の後百日一年三年七年が内に自界叛逆難じて此御一門同士打始るべし。其後は他國侵逼難じて四方よ

り殊に西方より攻められさせ給ふべし。其時後悔あるべし。平左衛門尉と申し付けしかごも。太政入道の狂^{くる}し様に少も變る事なく物に狂ふ。建治二年與光日房書

○同書續二四二皆人立ち歸る程に六郎左衛門尉も立歸る一家の者も返る。日蓮不思議一言はんと思て六郎左衛門尉を大庭より呼返して云く。いつか鎌倉へ登り給ふべき。かれ答て曰く。下人共に農させて七月の比と云云。日蓮云く弓箭とる者は公の御大事に逢て所領をも給り候をこそ。田畠作るは申せ。只今軍のあらんずるに急き。うち登り高名して所知を給らぬか。さすがに和殿原は相摸の國には名ある待ぞかし。田舎にて田作り軍に外れた

第二の豫
言の連
中自界
に逆難
叛を給
ふ告給

果して
自界叛
逆起る

らんは耻なるべしと申せしかば。いかにや思ひけん急遽ものも
云ず。○二月の十八日に島に船つく。鎌倉に軍あり京にもあり其
様申計りなし。六郎左衛門尉其夜に早船をもて一門に相具して
渡る。日蓮に掌を合て助けさせ給へ。去正月十六日の御言如何に
やと此程疑申しつるに何程もなく三十日が内にあひ候ぬ。又蒙
古國も一定渡り候ひなん念佛無間地獄も一定にてぞ候はんす
らん。永く念佛申候まじと申せしかば。いかに云ふとも相摸守殿
等の用ひ給はざらんには日本國の人用ゆまじ用るずは國必ず
亡ぶべし。日蓮幼若の者なれども法華經を弘れば釋迦佛の御使
ぞかし。○教主釋尊の御使なれば天照大神正八幡宮も頭を傾け

國家の
存亡の
聖祖の
有無

手を合せ地に伏し給ふべき事也。法華經の行者をば梵釋左右に
侍り日月前後を照し給ふ。かゝる日蓮を用ひぬることも悪く敬は
ば國亡ぶべし。何況數百人に悪ませ二度まで流しぬ。此國の亡び
ん事疑ひなかるべけれとも。且く禁をなして國を助給へと。日蓮
かひかうればこそ今まで安穩にありつれども法に過れば罰あ
たりぬるなり。又此度も用ひずは大蒙古國より打手を向て日本
國亡さるべし。和殿原とて此島とて安穩なるまじき也と申
せしかば。あさましげに立歸りぬ。

○佐渡御書内三十七寶治の合戦すでに二十六年今年二月十一日十
七日又合戦あり。○日蓮は聖人にあらざれども法華經を如説受

聖祖去
難時七
起る

持すれば聖人の如し。又世間の作法兼て知るによて注し置こ
是不可違。現世に云置言の違はざらんをもて後生の疑をなすべ
からず。日蓮は此關東の御一門の棟梁也。日月也。龜鏡也。眼目也。日
蓮捨去時七難必起るべし。去年九月十二日蒙御勸氣之時大音
聲を放て呼りし事此なるべし。纔に六十日乃至百五十日に此事
起る歟。文永九年三月二十日

三三
三頼第
に對面

○下山御消息内二二五六
総二五七九去文永十一年二月に佐土國より召返され
て同四月の八日に平金吾對面して有し時。理不盡の御勸氣の由
委細に申含ぬ。又恨らくは此國すでに他國に破れん事のあさま
しさよと歎き申せしかば。金吾が云。何比か大蒙古は寄也候べき

と問ひしかば。經文には分明に年月を指たる事は無れども。天の
御氣色を拜見し奉るに。以の外に此國を睨みさせ給か。今年は一
定寄せぬと覺ふ若寄するならば一人も面を向ふ者あるべから
ず。此又天の責也。日蓮をば和殿原が用ひぬ者なれば力及ばす穴
賢穴賢。眞言師等に調伏行はせ給ふべからず。若行はする程なら
ば彌々悪かるべき由申付てさて歸てありしに。上下共に先の如
く用ひざりげに有る上。本より存知せり國恩を報ぜんがために。
三度までは諫曉すべし。用ひずば山林に身を隠さんと思ひし也。
又上古の本文にも三度の諫用ひずば去れといふ。本文に任せて
且く山中に罷り入ぬ。其上は國主の用ひ給はざらん。に其已下に

聖祖の
遁隱の

法門申て何かせん。申したりごも國も助かりまじ人も又佛にな
るべしごも覺へず。建治三五年

第三豫
言的中
蒙古襲
來永の
役馬の
對略の
男女の
殺擒の
壹岐の
奉行の
遁逃の
弘安の
役

○一谷入道御書内三十五日蓮が申事は愚なる者の申事なれば用
ひず。されごも去文永十一年建治十月に蒙古國より筑紫によせて
有しに對馬の者固めて有しに宗、總馬、尉逃ければ。百姓等は男を
ば或は殺し或は生取にし。女をば或は取集て手を通して船に結
付或は生取にす。一人も助かる者なし。壹岐に寄ても又如是。船押
寄て有りけるには奉行入道豊前の前司は逃て落ぬ。松浦黨は數
百人打れ或は生取にせられしかば。寄たりける浦浦の百姓ごも
壹岐對馬の如し。又今度は如何が有るらん。彼國の百千万億の兵

蒙古の
使を切
る

亡國の
大事の
聖祖三
名の高

日本國を引廻して寄て有るならば如何に成るべきぞ。北の手は
先つ佐渡の島に付て地頭守護をば須臾に打殺し。百姓等は北山
へ逃ん程に或は殺され或は生取れ或は山にして死ぬべし。建治元年
五月八日
○蒙古使御書外三二又蒙古の人の頸を刎られ候事承り候。日本
國の敵にて候念佛眞言禪律等の法師は切られずして科なき蒙
古の使の頸を刎られ候ける事こそ不便に候へ。子細を知らる人
は勘へあて候を憍て云ふと思ふべし。此二十餘年の間私には
晝夜に弟子等に歎き申し公には度度申せし事是也。一切の大事
の中に國の亡るが第一の大事にて候也。建治元年 與西山高橋入道書
○撰時鈔内二四一五外典云、未萌を知を聖人云ふ内典云、三世を知

第一諫

を聖人かみと云ふ。余おのれに三度の高名かうなむあり。一には去いし文應元年ぶんおう元年七月十六日に立正安國論を最明寺殿に奏し奉たてまつし時。宿屋入道に向て云、禪宗ぜんしゆと念佛宗ねんぶつしゆを失うしなひ給へしと申させ給へ。此事を御用ごようひ無ならば此一門より事起て他國に攻られさせ給ふべし。二には去い文永八年九月十二日申の時に平左衛門尉に向て云、日蓮は日本國の棟梁也むねなみ予われを失ふは日本國の柱はしらを倒すなり。只今に自界反逆難じかいはんとて同士打して。他國侵逼難たいかんとて此國の人人他國に打殺さる耳ならず多く生取にせらるべし。建長寺壽福寺極樂寺大佛殿長樂寺等の一切の念佛者禪僧等が寺塔をば焼拂ひて。彼等が頸を由比の濱にて切らずば日本國必亡ぶべしと申候了しやう。第三には

第三諫

去年こぞ文永四年四月八日左衛門尉さゑもんゑい語こと云、王地に生なまたれば身をば隨へられ奉る様なりさむらひとも心をば隨へられ奉るべからず。念佛の無間地獄禪の天魔の所爲なる事は疑ひなし。殊に眞言宗が此國土の大なる災にては候なり。大蒙古を調伏せん事眞言師には仰付らるべからず。若大事を眞言師調伏するならば彌急いで此國亡ぶべしと申せしかば。賴綱問て曰く何頃寄せ候へき。予われ云、經文には何時いつこは見へ候はねども。天の御氣色怒り少なからず急に見へて候よも今年は過とほし候はじと語りたりき。此三の大事は日蓮が申たるにはあらず。只偏に釋迦如來の御神みたま我身に入替らせ給ひけるにや我身なからも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申す大

世尊
豫言

事の法門はこれなり。建治元年

○顯立正意鈔續内一七三大覺世尊記云、苦得外道有七日可死死後生食吐鬼。苦得外道云、七日内不可死我得羅漢不生餓鬼道等云云。瞻婆城長者婦懷妊六師外道云、生於女子佛記云、生於男子等云云。佛記云、卻後三月我當般涅槃等云云。一切外道云、是妄語等云云。如佛記、二月十五日般涅槃給耳。○佛記未來世事上所舉苦得外道等三事不普合者誰信佛語。設多寶佛加證明分身諸佛長舌付梵天給難信用歟。今亦以如是設日蓮得富樓那辯現目連通所勸不當誰信之。去文永五年蒙古國牒狀所渡來我朝有賢人可怪之。設不信其去文永八年九月十二日蒙御勸氣之時所吐強言。次年二月十一日令普

聖祖の
明鑑

合有情者可信之。何況今年既彼國災兵之上奪取二箇國設雖爲木石設雖爲禽獸可感可驚偏非只事天魔入國如醉如狂可歎可哀可恐可厭。文永十二年十二月十五日

聖祖の
敬神

○神國王御書綴外一三四七夫以日本國を亦云水穗國亦野馬臺又秋津島又扶桑等云云。六十六國二島已上六十八ヶ國東西三千餘里南北は不定也。此國に五畿七道あり五畿に申は山城大和河内和泉攝津等也。七道に申は東海道十五箇國東山道八箇國北陸道七箇國山陰道八箇國山陽道八箇國南海道六箇國西海道十一箇國亦云鎮西又太宰府云云。已上此は國也。國主を尋れば神世十二代天神七代地神五代天神七代第一者國常立尊乃至第七伊奘諾尊男

天神七
代

地神五代

神は主君の靈

日本は万國に勝る

也伊奘册尊妻也。地神五代の第一は天照太神伊勢太神宮日神是也。伊奘諾伊奘册の御女也。乃至第五は彦波瀲武鸕鷀草葺合尊。此神は第四の彦火火出見尊の御子也。母は龍女也。已上地神五代。已上十二代は神世也。○神ご申は又國國の國主等の崩去し給へるを生身の如く崇め給ふ。此又國王國人の爲の父母也。主君也。師匠也。片時も背かば國安穩なるべからず。此を崇れば國は三災を消し七難を拂ひ人は病なく長壽を持ち。後生には人天ご三乗ご佛ごなり給ふべし。而るに我日本國は一閻浮提の内月氏漢土にもすぐれ八萬の國にも超へたる國ぞかし。其故は月氏の佛法は西域等に載られて候。但七十餘國也。其餘は皆外道の國也。○此日本

我面を
見るは
明鏡
國の盛
衰は佛
鏡

國は外道一人もなし。其上神は又第一天照太神第二八幡大菩薩第三は山王等の三千餘社。晝夜に我國を守り朝夕に國家を見そなわし給ふ。其上天照太神は内侍所ご申明鏡に影を浮へ内大裏に崇られ給ひ。八幡大菩薩は寶殿を捨てて主上の頂を栖ごし給ふご申す。佛の加護ご申し神の守護ご申し如何なれば彼の安德ご隠岐ご阿波佐渡等の王は相傳の所從等に攻られて或は殺れ或は島に放れ或は鬼ごなり或は大地獄には墮ち給ひしぞ。○日蓮此事を疑ひしゆへに幼少の比より隨分に顯蜜二道並に諸宗の一切經を。或は人に習ひ或は我ご開き見し。勘へ見て候へば故の候けるぞ。我が面を見る事は明鏡に依るべし。國土の盛衰を計

水船を助ける亦破る

ることは佛鏡に過くべからず。仁王經金光明經最勝王經守護經
涅槃經法華經等の諸大乘經を開き見奉り候に。佛法に付て國も
盛へ人の壽も長く。又佛法に付て國も亡び人の壽も短かかるべ
し。見へて候。譬へば水は能く船をたすけ水は能船を破る。五穀
は人を養ひ人を損す。小波小風は大船を損する事かたし大波大
風には小船を破りやすし。王法の曲るは小波小風の如し大國と
大人をば失ひかたし。佛法の失あるは大風大波の小船を破るが
如し。國の破るる事疑なし。建治元年 奥松野六郎左衛門番(持師之兄)

聖祖の尊王

○同書續一三五人王八十一代をば安德天皇と申す父は高倉院の
長子母は太政入道の女建禮門院也。此王は元暦元年三月二十四

四王の奉移

日八島にして海中に崩給ひき。此の王は源頼朝將軍に責られて
海中の魚族の食となり給ふ。人王八十二代は隱岐法皇と申す高
倉の第三の王子文治元年御即位。八十三代には阿波院隱岐法皇
の長子建仁二年に位に即給ふ。八十四代には佐渡院隱岐法皇の
第二の王子承久三年二月二十六日に王位に即給ふ同き七月に
佐渡の島にうつされ給ふ。此の二三四の三王は父子也鎌倉の右
大將の家人義時に責られさせ給へる也。

朝敵の現罰

○富木入道殿御返事外ニセ三七遠例且置之近我朝に代始て人王八
十餘代之間大山皇子大石小丸を爲始二十餘人王法に奉爲敵一
人として素懷を遂けたる者なし。皆頸を獄門に被懸骸曝於山野。

關東の武士等或源平或高家等奉捨先祖相傳君伊豆國の爲民義時が下知に隨ふ故にかくる災難は出來也奉背王法隨民下知者如師子王被乘野狐馳走東西南北今生の耻如何之弘安四年十月二十二日

○筒御器鈔内九三十一日本國に代始てより已に謀叛の者二十六人

第一は大山の王子第二は大石の小丸乃至第二十五人は頼朝第二十六人は義時也二十餘人は奉被責朝獄門に被懸首山野曝骸

二人は奉傾王位國中を拳手王法既に盡きぬ弘安三年正月二十七日 秋元太郎兵衛殿御返事

○内房女房御返事外九七三又王と申は三の字を横に書きて一の字を豎さまに立てたり横の三の字は天地人也豎の一文字は王也須彌山と申す山の大地をつきこをして傾かざるが如し天地

王の字の分解

法華大王

諸宗所從

上下剋

人を貫きて少しも傾かざるを王とは名けたり王に二あり一には小王也人王天王是也二には大王也大梵天王是也日本國は大王の如し國國の受領等は小王也華嚴經阿含經方等經般若經大日經涅槃經等の已今當の一切經は小王也譬へば日本國中の國王受領等の如し法華經は大王也天子の如し然れば華嚴宗眞言宗等の諸宗の人人は國主の内の所從等也國國の民の身として天子の徳を奪ひ取るは下剋上背上下破上下亂等これ也設ひいかに世間を治めんと思ふ志ありとも國も亂れ人も亡ひぬべし譬へば木の根を動さんに枝葉靜なるべからず大海の波あらからんに船穩かなるべきや弘安三年八月十四日

日本と
天竺

○四條金吾殿御返事内二六三九夫佛法に申は勝負を先とし王法に申は賞罰を本とせり。故に佛をば世雄と號し王をば自在と名けたり。中にも天竺をは月氏と云ふ我國をば日本と申す一閩浮提八万の國の中に大なる國は天竺小なる國は日本也名のめでたきは印度第二扶桑第一なり。建治三年

○撰時鈔内二二三五日本國と申は天照太神の日天にてましますゆへなり。建治元年

○日眼女釋迦佛供養事内二二三八日本國と申は女人の國と申國也。天照太神と申せし女神のつきいだし給へる島也。弘安二年二月二日

○與北條時宗書外二八六夫此國神國也神不稟非禮。天神七代地神五

日本は
神國

神は非
禮稟け

正直を
以て力
となす

代、神神其外諸天善神等、一乘擁護神明矣。然而以法華經爲食、以正直爲力。法華經云、諸佛救世者住於大神通、爲悅衆生、故現無量神力。於一乘棄捨之國、豈善神不成怒耶。仁王經云、一切聖人去時七難必起矣。彼吳王捨伍子胥、詞亡吾身、桀紂失龍比、喪國位。今日本國既奪蒙古國、豈不歎乎。豈不驚乎。日蓮申事無御用者、定後悔可有之。日蓮法華經御使也。經云、則如來使如來、所遣行如來事。三世諸佛事者、法華經也。此由方方奉驚之集、一所有御評議可豫、御報候所詮、拋万祈召合諸宗、於御前決佛法邪正、給瀾底長松、未知良匠之誤、闇中錦衣未見愚人之失。於三國佛法分別者在、殿前所謂阿闍世陳隋桓武是也。敢而非日蓮私曲、只偏懷大忠、故爲身不申之、爲神爲君、爲國爲一

誓願

切衆生所令言上也。恐恐謹言。文永五年十月十一日

○開目鈔續内一六三詮する所は天も捨て給へ諸難にも逢へ身命を期
ごせん。身子が六十劫菩薩行を退せし乞眼婆羅門の責を堪へざ
るゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる悪知識に値ふゆへなり。
善に付け悪につけ法華經を捨るは地獄の業なるべし。大願を立。
日本國の位を譲らむ法華經を捨て觀經等について後生を期せ
よ。父母の頸を刎切念佛申さすば。なんごの種々の大難出來すとも
智者に我義破られずは用じこなり其外の大難風の前の塵なる
べし。我日本の柱こならむ我日本の眼目こならむ我日本の大船
こならむ等こ誓し願破るべからず。文永九年二月

日本國の柱

○報恩鈔續内一四八二去文永八年九月十二日に平左衛門並に數百人
に向云。日蓮は日本國の柱なり日蓮を失ふ程ならば日本國の柱
を倒すになりぬ。建治二年七月二十一日

○波木井殿御書續外二二二五日蓮は日本の大難を拂ひ國を持つべき
日本國の柱也。余を失ふならば日本國の柱を倒す也。弘安五年九月七日

日本は大乗の國
論釋の記文

○曾谷入道殿許御書續内二二二五彌勒菩薩瑜伽論云。東方有小國其中
唯有大乘種姓云云。○肇公之翻經記云。大師須梨耶蘇摩左手持法
華經。右手摩鳩摩羅什頂授與云。佛日西入遺耀將及東。此經典有緣
於東北。汝慎傳弘云云。予拜見此記文。兩眼如瀧。一身徧悅。此經典有
緣於東北云云。西天月支國未申。方東方日本國丑寅方也。於天竺有

緣東北豈非日本國哉。遵式之筆云。始自西傳。猶月之生。今復東返。猶日之昇云云。正像二千年自西流。東暮月之如始。西空。末法五百年自東入。西朝日之似出。東天。根本大師記云。語代則像終末。初尋地。唐東羯。西原人。則五濁之生鬪爭之時。經云。猶多怨嫉。況滅度後。此言良有以。故云云。又云。正像稍過已。末法太有近。法華一乘機。今正是其時。何以得知安樂行品云。末世法滅時也。云云。文永十二年三月十日。

第十五 社會 篇

閻浮 統一

○報恩鈔縮内一五九七日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごこに有無無智をさらはず一同に他事をすてく南無妙法蓮華經と唱ふべし。

世界 安穩

此事いまた弘らず一閻浮提の内に佛滅後二千二百二十五年が間一人も唱はず。日蓮一人南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經等と聲もをしまさず唱ふるなり。建治二年七月二十一日

○如説修行鈔卷之三十三天下万民諸乘一佛乘と成て妙法獨り繁昌せん時。萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば。吹風杖をならさず雨壤を不碎。代は義農の世となり今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得。人法共に不老不死之理顯れん時を各御覽ぜよ。現世安穩の證文不可有疑者也。文永十年五月

大法 廣布

○諫曉八幡鈔縮内二四七天竺國をば月氏國と申佛の出現し給ふべき名也。扶桑國をば日本國と申す。豈に聖人出給はざらむ。月は西

より東に向へり月氏の佛法の東へ流るべき相也。日は東より西へ入る日本の佛法の月氏へ還るべき瑞相也。月は光明かならず在世は但八年なり。日は光明月に勝れり五五百歳の長き闇を照すべき瑞相也。佛は法華經謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに。末法には一乗の強敵充滿すべし不輕菩薩の利益此れなり。各我弟子等は勵ませ給へ勵ませ給へ。弘安三年十二月

良閣浮の

○高橋入道殿御返事内三三五、三三九醫師の習病に隨て藥を授くる事なれば。我滅後五百年が間は迦葉阿難等に小乘經の藥を以て一切衆生に與よ。次の五百年が間は文珠師利菩薩彌勒菩薩龍樹菩薩天親菩薩に華嚴經大日經般若經等の藥を一切衆生に授よ。我滅

釋迦の理想

後一千年過て像法の時には藥王菩薩觀世音菩薩等。法華經の題目を除て餘の法門の藥を一切衆生に授よ。末法に入なば迦葉阿難等文珠彌勒菩薩等藥王觀音等の讓られし處の小乘經大乘經並に法華經は文字はありとも衆生の病の藥とはなるべからず。所謂病は重し藥は淺し。其時上行菩薩出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生に授くべし。建治元年七月十三日

○小乘大乘分別鈔外一、四六佛と經とは父母の如し。九界の衆生は實子なり。聲聞緣覺の二人永不成佛の者となるならば。菩薩六凡の七人あに得度を許さるべきや。今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子乃至唯我一人能爲救護の文をもて知るべし。文永十年 興富木杏

平等
世界

○一念三千法門外二十七天台の所釋に一色一香無非中道二と釋し給へり。此時は十方世界皆寂光淨土にて。何れの處をか彌陀藥師等の淨土とは云ん。是を以て法華經に是法住法位世間相常住三と説給ふ。正嘉二年

理想の
活現の

○義口傳下十當品意我者法界衆生也十界已已指我云也。實者無作三身佛也。定此實云也。弘安元年正月

○御義口傳下十八當品流布國土者日本國也總南閩浮提也。

第十六 人倫篇

第一 忠義

忠孝の
龜鑑の

○開目鈔上内七四七夫一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親これなり。又習學すべき物三あり所謂儒外内これなり。儒家には三皇五帝三王此等を天尊と號す。諸臣の頭目万民の棟梁なり。三皇已前は父を知らず人皆禽獸に同ず。五帝已後は父母を辨へて孝を致す。所謂重華は頑かたくなしき父を敬ひ沛公は帝となつて太公を拜す。武王は西伯を木像に造り丁蘭は母の形を彫刻きやくり。此等は孝の手本也。比干は殷の世の亡ぶべきを見て強て帝を諫め頭を刎らる。公胤きんと云し者は懿公の肝を取て我か腹を割き肝を入れて死しぬ此等は忠の手本也。文永九年二月

四條の
忠義の

○頼基陳狀内二六三官仕をつかまつる者上下ありと申せども分

分に隨て主君を重せざるは候はず。上の御爲現世後生悪く渡らせ給ふべき事を祕かにも承りて候はむに。傍輩世に憚て申上ざらむは與同罪にこそ候まじき歟。隨て賴基は父子二代命を君に參せたる事顯然也。故親父故君の御勸氣蒙らせ給ひける時。數百人の御内の臣等心替りし候けるに。中務一人最後の御供奉して伊豆國まで参りて候き。賴基は去文永十一年二月十二日の鎌倉の合戦の時。折節伊豆國に候しかば十日の申の時に承て唯一人。菅根山を一時に馳せ越へて御前に自害すべき八人の内に候き。自然に世靜まり候しかば。于今君も安穩にこそ渡らせ給ひ候へ。爾來大事小事に付て御心易き者にこそ思ひ含れて候。賴基が今

更何につけて疏縁に思ひ參せ候べき。後生ままでも隨從し參せて賴基成佛し候はゞ君をも救ひ參らせ君成佛しましまさば賴基も助けられ參らせんこそ存し候へ。建治三年六月二十五日

第一 孝行

○刑部左衛門尉女房御返事續外一九八四父母の御恩は今初て事新たに申へきには候はねども母の御恩の事殊に心肝に染て貴く覺へ候。飛鳥の子を養ひ地を走る獸の子に責られ候事目もあてられず魂も消ぬべく覺へ候。其に就ても母の御恩忘れ難し。胎内九月の間の苦み腹は鼓を張れるが如く頸は針を下げたるが如し。氣は出るより外に入る事なく色は枯たる草の如し。臥をば腹もさ

恩を説
て孝を
勸む

三年懷
に在り

けぬへし坐すれば五體やすからず。かくの如くして産も既に近
づきて腰は破れてきれぬへく眼はぬけて天に昇るか。こ覺ゆ。か
かる敵を産落しなば大地にも踏みつけ腹をも割て捨へきぞか
し。左は無くして我が苦を忍て急きいだきあげて血をねぶり不
淨をすくぎて。胸にかきつけ懷いだきかくへて三箇年が間懇懃に養
ふ。○而るを親は十人の子を養へども子は一人の母を養ふ事な
し。暖かなる夫をば懷きて臥せども凍へたる母の足を暖むる女
房はなし給孤獨園こどくえんの金鳥は子の爲に火に入り憍戸迦夫人は夫
の爲に父を殺す。弘安三年十月二十一日

子は寶
なり

○上野殿御返事外一九七八女子は門をひらく男子は家を繼ぐ。日本

國を知ても子なくは誰にか繼すべき財を大千にみてても子な
くば誰にか讓るべき。されば外典三千餘卷には子ある人を長者
といふ。内典五千餘卷には子なき人を貧人といふ。女子一人男子
一人譬へば天には日月の如し地には東西にかたざれり。鳥の二
の羽車の二の輪なり。さればこの男子をば日若御前ひわがみに申させ給
へ委くは又又申すべし。弘安三年八月二十六日

守綱の
孝養

○阿佛房鈔内三十一故阿佛房聖靈は日本國北海の島の夷いびの身な
りしか。ごも後生を恐れて出家して後生を願ひしが。此人日蓮に
値て法華經を持て去年の春佛に成りぬ。○其子藤九郎守綱は此
の跡をつぎて一向に法華經の行者となりて。去年は七月二日父